

喇嘛教々理概説

寺本婉雅

目次

- (一) 西藏無文時代の狀態
 - (二) 西藏建國時代に佛教傳播
 - (三) 西藏佛教の破壊
 - (四) 西藏佛教の復興
 - (五) 梵教と佛教との衝突
 - (六) 西藏佛教混沌時代
 - (七) 西藏佛教各宗派の興起
 - (八) 舊顯教
 - (九) 舊密教
 - (十) 舊教の教義
 - (十一) 阿提沙の改革
 - (十二) カーダムバ派の教義
菩提道燈論の要抄
 - (十三) カーヂユバ派
 - (十四) マルバ、カーヂユバ派
-
- (十五) ケーチユブ、チユンボ、カーヂユバ派
 - (十六) ダクボ、カーヂユバ派
 - A ミラ、レバ略傳
 - B ダクボ、カーヂユバ派の教義
 - C ゼツン、ミラの教義
 - D 大手印の教義
 - (十七) カルマ、カーヂユバ派
 - (十八) シ、ツェバ派の教義
 - (十九) 薩迦派の傳系と教義
 - A 薩迦派の袞族の血脈相傳
 - B クンガー、ヂャル、ツァンの略傳
 - C 怕克巴の略傳
 - (二十) 新教宗喀巴の改革
- 已上

(一) 西藏無文時代の狀態

西藏無文時代に於て已に佛教は印度より比摩拉耶山を越えて蒙昧なる西藏民間に流傳せしことは古典に徴して知らる。「古代龜茲國の洞窟壁文」によれば、「觀貨羅王プレトン王 (Prehre, Pithiri?) が闍那敎徒 (Nirgrantha, 離繫子、裸體外道) の書を藏王ニヤーチ、ツアンボ (g'nan-kin b'tsan-po) に送呈せしむる、阿鼻地獄鬚 (Avichi-j-Phrei-pa) と名くる龍樹の偽書を送つたから藏王は非常に怒つて火中に投じた」(Alt-kutscha, von Grünwedel. p. 10.) 云々。このニヤーチ、ツアンボ王は龍樹と同時代出世の迦膩色迦王の滅後に於ける時代と同時の出世にして、大約西曆一世紀半、又は二世紀頃の出世なりと推定せらるであらう。

天人七代の後、地人六代を経て更に三代目に至り、史上有名なるトトリ、ニヤンツマン王 (Tho-
Tho Ri g'nan-b'tsan) 出で、王は戊申歲(西曆三四八)に生れ、丁卯歲(西曆三六七)に二十歳にして即位した(「蒙古源流」卷一、一五)。王は六十歳のとき、ヤンプ、ラーガン山 (Yan-bu G'la-Sgan) に宮殿を建築した。當時の宗教は西藏人種の原始的宗教即ち梵敎 (Bon-po) の信者であつた。梵敎とは元來羌族の巫敎にして、薩滿敎の別稱である。トトリ王の時代に佛教は印度より流轉せられて、特に「寶器莊嚴經」(漢譯大方廣寶篋經)、「百拜懺悔經」、「十善敎」、「十二因經緣」、黄金寶塔等は無文時代

より天降の梵籛なりとして尊重せられてゐた。西紀二五年代に西藏文化が觀貨羅國より埃及人の藝術家アンテニ (Anteni, Antonies) 等によりて輸入せられたことの事實は知り得らるゝであらう。

(Alt-kutscha. p. 175)。

(二) 西藏建國時代と佛教傳播

西藏トトリ、ニヤンツアン王より後五代目にしてチデ、スロンツアンガンボ王 (Khr'i-Idé Ston-bTsan Sgm-po) 生れた。(西曆六一七)。「唐吐蕃傳」の特勤德、蘇隆贊王なるものは是である。王は唐貞觀二年 (629. A.D.) に十三歳にして即位し、同八年に唐太宗と同盟を結び、同十五年 (641 A.D.) に文成公主を迎え、唐文明を輸入した。それより先きに王は梵教開祖トンバ、センラブ (Ston-pa gCen-Rabs) の生地シヤン、シユン地 (Shah-Shun) より王妃ザリー、チクマン (bZah-Li Thig-Sman) を迎えた。當時の藏民は悉く梵教の崇拜者であつた。

王は大臣トンミ、サムブホタ (Thon-mi Sambhota) 等十六人を印度に留學せしめた。彼等は還藏の後ち始めて西藏文字を創定した。西藏文典八部を著はす、現存さるもの僅に二部のみ。トンミ、サムブホタは勅を奉じ、阿闍梨耶クラサ (kurasa) と、婆羅門シヤンカラ (Cankara) と、ネパール國の阿闍梨耶シーラ、マンジュ (Cha-manju) と、支那の大乗學者某和尚等の協力に依て天降聖典(上記)を

西藏語に翻譯した。これ譯經の最初の聖業である。(dPag-bSum Tjon-bZan, p. 107. C. IX)。今かの「百拜懺悔經」を検するに、「阿閼佛、寶生佛、阿彌陀佛(Snam Ba mTha-Yas)、不空成就如來、その他十方諸佛を敬禮し、罪業を淨め、臨終來迎の思想を述べて成佛を期してゐる」。これらの聖典はトトリ、ニヤンツァン王時代に慧心護 (mañicitta-rakṣita, Blo-Sems hTsho) の翻譯家リ、テセー (Li-The-Se) の二人が西藏に弘通の爲め將來せしものなれども (407. A. D.)、當時は梵教旺盛の時代にして佛教弘通に未だ適せない時機であつたから、之を隱匿しておいたものであるといふ史實を明瞭にするを得た。かの天隣の經典といふ傳説は、かゝる裏面の史實を神話化したものに過ぎない。

特勤德、蘇隆贊王は佛教を印度より輸入し、藏民の文化を高め、觀音の呪文唵嘛呢叭唵吽 (Om̐ma nipamēhu:n) の六字眞言を唱へしめて一般民族教心を統一した。王はネパール國より阿閼佛像を請來し (638. A. D.) 支那より釋尊像一軀を請來し、伽藍を建て、諸經を譯出せしめた。その後チスロン、デウツァン王 (Kri-sron ldehu-bTsan) 生れた (728 A. D.)。王は長じて佛教を國內に宣布せんとし、サンシラ (Sain-Ci-la) 等四人を支那に留學せしめ、印度より阿難陀等を聘して翻譯事業を開始し、バサルナン (Sba-gSal-Snan) をネパール國に派し、教師を聘せしめた。彼はカンツェン大陀布、ポデイサット菩提薩埵又の名寂護 (gānta-rakṣita, Shi-ba hTsho) に邂逅し、來藏を請ひ、サムエ地 (Ssum-Yas) に招しぬ。王は又蓮華生師 (Padma-hByun-yNas) 等の多くの博學者を招聘した (747 A. D.)。蓮華生師は弟子二

十五人と俱に眞言祕密 (Sani-Singas) の教理を説き、多くの研究者を出した。

當時已に支那よりマハーヤーナ和尙 (mahāyāna) なるもの來錫し、法幢を樹立し、善不善の智覺は共に眞智にあらず、迷妄輪廻を招來する因となる。黄金の鎖と鐵の鎖とは、その鎖たることに於ては何等差別なきが如く、眞の悟道の要は無念無作の境に到達して解脱を得べきのみと説いた。當時の西藏宗教學者は支那和尙の説に雷同し、何等の考察を狭むものなかつた。佛教傳來當初に於ける菩提薩埵の教學は、是れが爲めに衰微に傾いた。

茲に於て王は印度教學派と支那教學派との優劣を決せんとして、印度よりカマラシーラを聘し、サムエー廟に於て王の面前にて支那和尙と法戰を開かしめ、遂に支那和尙の敗北に歸し、法幢を捲いて支那に還り、王は印度教學を採用し、龍樹の中觀論系を以て國教と定めた。菩提薩埵一名寂護 (gāntarākṣita 750 A.D.) には Tattvasaṅgraha (眞理の把住) の著あり、彼の弟子カマラシーラ (kamalagīta) は是の註釋を造つた。かくて王は唐長安府に入冠し (673 A.D.)、その後數年ならずして王は崩じぬ、享年六十九歳である (786 A.D.)。王の子ムネツマンポ (Mu-Ne bTsan-po) は佛教の崇敬に心を拂ひしも、邪惡なる臣下の爲めに騷擾三度に及び、國家多事を極むる裡、不幸短命にして、歳十七にして終つた。

その後ツンチ、デツツァン、サナレツ王 (gTsun-khri Sdehu-bTsan Sad-na- Legs) 卽位し、佛教を

保護した。その子チデーツクタン、ラルバ、チャン王 (Khr'i-lde g'Tsug-brtan Rab-pa-can) は十八歳にして即位し、(816 A.D.)、佛教を奨励し、人智の啓發を謀り、オジャンド (Hod-ijan Rdo) の伽藍を黄金の瓦を以て葺き、チスロン、デウツァン王の遺蹟を修理し、西藏の宗教風規を改善擴張した。かくて王は唐と開戦し、唐の孝徳帝の慶長三年 (823 A.D.) に、唐蕃同盟碑文を西藏拉薩の大招寺 (Jo-Chen-Mo) の庭前に建て、國光を發揚した (拙譯「唐蕃同」
監碑文參照)

王の代にジナ、ミットラ (Jinamitra, 勝友) 等の多くの博士を印度より招聘し、大小二乗經典を譯し聖典目錄を製し、新律法を創定し、西藏の宗教は大小二乗の聖典に據り、他の如何なる經典の採用をも嚴禁し、就中、說一切有部に從ひ、菩提薩埵の定めし教學によるべきを命じ、祕密呪法の如き淫蕩なる修行派を絶滅せんとし、祕密曼特羅 (g'San-Shags) に關する一切典籍の翻譯を嚴禁し、昔日譯出した釋尊の經典を勘校し、その傳系を一定し、藏民修學の法燈を統攝した。爰に教團は淨化刷新の風規を生じ、佛教隆盛を極むるに至つた。

(三) 佛教の破壊

叙上の如く、祖宗三王の中、ラルバ、チャン王出で、佛教を宣布し、特に毘奈耶の清規を訂校し、佛教を尊重せしと雖も、當時は愚昧なる臣庶尙多く梵教 (Bon-to) を崇拜し、教法弘通に妨礙

を加えしかば、王は是等の抵抗に堪へかねて遂に病没した。(899 A.D.)。王子ツマンヤ (gTsan-ma) を始め、諸の沙門等は大抑壓を蒙りぬ。

此ときに於てラルバ、チャン王の弟ランダルマ (Glan-Dar-Ma) なるものは王位に登り(899 A.D.) 五年を経て佛教信者を壓し、益々迫害を加へ、王は佛教不信の群臣に勅令を下だし、翻譯家、博士等の聖典翻譯を嚴禁し、彼等を放逐し、オジャンド殿堂に於て、佛事禮拜することを禁じた。王の迫害は啻に是のみに止らず、即位後僅かに五六年を経て、西藏に於ける諸の喇嘛を悉く壓迫し、兵を率ひ、羯鼓を打ち、弓箭を放ちて賢哲沙門を悉く殺害し、一般民間の佛教信者を蹂躪し、殺害したこの時ハールン、バルヂ、ドルゼ (Tha-Tun dPal-gyi-Rdo-Rje) なる一喇嘛あり。王の暴逆無道を憤慨し、王を暗殺せんとしてその機會を窺ふてゐた。一日王は拉薩首府の法輪殿大招寺 (Jo-Chen-Mo) の庭前に建てる石碑の側に來りて逍遙するを視て、機を窺ひ箭を放つて王を射殺し、彼は其場を逃れ、喀木^{カクム}地方に遁亡した。王の暗殺により癡癡なる臣民は多くの博士沙門を殺害し、或は捕縛たし或ものは國外に逃亡し、西藏國內には出家沙門の一人の影すら残らない程大破壊を行ふた。斯くすること十七ケ年間に及び、西藏は全く闇黒時代に陥つたのである。

(四) 西藏佛教の復興

ランダルマ王が佛教を破壊せし當時に、拉薩市の西南三十二哩に大チェボト山 (Chu-toh-ti Ri) あり、かしこの山に籠つて冥想修行せる三名の沙門は密かに西藏國を逃亡し、安土地 (今支那甘肅省の貴德廳附近) に來り、ラツェン、ゴンバ、ラブサル (Ba-chen dGonis-pa Rab-gSar) に師事して具足戒を授かり、同時に西藏ルメー地 (Ku-Mes) よりツチム、セラブ (Tshu-khrims ges-Rab) 等十名來りてラツェン師に従ひ、具足戒を受け、彼等十名は再び還藏し、各自分袖し、熱心に布教し、靈地に寺院を建て、教團を養成した。是に由て一時闇黒時代と變じた西藏も、安土地方の殘火より再煙し、西藏内地の處々に佛教の烽火傳播し、年を経、月を重ねるに従ひ、教勢擴大した。この佛教再興の偉業は實にラツェン師を始め十名の不惜身命の信仰熱によるものとして、後世にその徳を稱へらる。

ラツェン師の熱誠なる佛教復興事業に依て稍、佛教の曙光を見るに至つたのであるが、その上方より復興せし事情を少しく叙せんに、藏王であつて出家せしイーシオッド (Iha Bla-ma Ye-ges-Hod) なるものはリンツェンザンポ (Rin-chen bzai-po) を印度に派遣し、數年にして迎藏し、經と曼特羅とを多く翻譯し、精密なる解説によりて意義を明白にし、不正の曼特羅を校訂し、以て佛教中の調和を謀り雪山の國民に慈光を宣揚した。ゴロ族 (KGo-Log) のシヨヌマ、バン (gShon-Nu dPal) は前系と後系との曼特羅を宣傳し、その宗風を旺盛ならしめた。藏王イーシ、オッドはその宗風の稍、隆

盛なるに及んで寂示した。又イーシ、オッド王は印度東部地方より班抵達ダルマ、バーラ(Dharma-pala)及其の弟子サーンフ、バーラと、クナーバーラと、ブラジュニヤーバーラ等を招致し、佛教興隆を圖つた。この時シャン、シエン地のチャルビ、セラブ(Rgyal-Bain Cos-Ran)なるもの出家し、彼等に師事して具足戒を授かり、その後ネパール國に到り、持戒者プレタカ(Pretaka)に就て戒律を修行し、彼の弟子バルチョル、セラブ(Dal-Byor Cos-Ral)と、シンモツエ地のチャン、チュブ、セング(Shi-mo-che-ba Ryan-Chub Sei-Ge)等よりの教系を上方毘奈耶と稱して有名である。

又他の王統の代に迦濕彌羅國の班禪釋迦師利(Calyani)を聘し、多くの經及び論疏を譯出した、此の教系を稱して班禪系と云ふ。教法の前系とは、佛經說法の根本は毘奈耶に存するが故に、戒律を基とし、之が修行と宣布とを企圖する教派を云ふのである。教法の後系とは、安土地より再起せし復興事業を指示し、何れも善法を生ずる教法なるが故に斯く稱すると云はるのである。

(五) 梵教と佛教との衝突

西藏民族固有の宗教は梵教(Bon-po)であつて、薩滿教と共通の巫教である。梵教の開祖はシャンシエン地に生れたセンラブ、ミーボ(gCen-Rabs Mi-po)といふもので、釋迦族に屬するセン族より生れたから、種族の名を冠してゐる。藏王ニヤーチ、ツァンボ(gNah-khri bTsan-po) (西曆一世)より

チデー、トクツァン王 (khri-Rde Thog-bTsar; 402 A.D.) に至るまでを啓示の梵教と稱し、チグンツァンボ王 (Gri-Gum bTsan-po) よりスロン、ツァンガンボ王 (Sron-bTsan Sgan-po; 617 A.D. 生) に至るまでを邪道の梵教と稱してゐる。孰れも一般藏民の信仰として勢力を有してゐたので、西藏人種は諸種の人種の混合であるが、皆梵教であつて、今日尙山澗僻地には殘存してゐる。こうした民族宗教の中へ佛教がヒマラヤ山を越えて傳播され、西紀二世紀前後には既に相當の信仰を民間に播殖されてゐたのであるが、當時は無文時代であつたから、佛教々理が一般的に理解されてゐなかつたので、只王宮や、智識階級の間には梵語や、迦濕彌羅語等を通じ外來文化思想として傾聽されてゐたが、スロンツァンガンボ王出世によりトンミ、サンブホタの文字創定によつて始めて譯經が開始され、官民共に佛教思想を宗教として味ふやうになつたものである。

故にランダルマ王の佛教破壞 (904 A.D.) に至るまでは、西藏の宗教は梵教と佛教との混同である。と考へられてゐる (The Buddhism of Tibet, Waddell's) 併かし西藏學者の著はしてゐるいろいろの宗教史を通覽するに、西藏佛教は開國のスロンツァン、ガンボ王を始め、各代の諸王が西藏文化の爲めに國家事業として印度の佛教聖典を藏譯し、之を欽定とし、國教として一般民衆に公布し、諸の伽藍靈廟を國營とし勅命によりて僧官を制定し建國の中心理想を佛教殊に中觀派に基いて定め、民族の淫祠や梵教、さ

ては邪道の曼特羅崇拜を嚴禁したのである。これが爲めに梵教は山間僻地に逃れて餘煙を保守した

のであるが、トンバセンラブ (Ston-pa s. Shen-Rabs) なるもの、梵教の衰滅を憂ひ、佛教の般若皆空の思想を應用し、荒蕩無稽の巫教をして一躍定觀哲學の梵教たらしめて、諸王の政治的壓迫を遁れしめたことである。(拙譯「十萬白龍」參照) それ故に西藏の宗教は西紀六一七年スロン、ツァンガンボ王出世以來、佛教は國教として西藏王宮の盛衰と共に傳播したのであるが、その後ラルバ、チャン王の佛教尊重により、毘奈耶の修訂に基いて、教團の腐廢に反して民間の梵教の擡頭は、王の治政をして非常に困難ならしめ、王は此兩教の新舊思想の衝突に耐えかねて病没したのである。次で王の弟ランダルマ王は梵教を信じ、佛教を彈壓し、兵力を以て佛教徒を殺害し、教團諸寺を破壊した。王の梵教信者として佛教を壓迫したのは、何の原因に由るかは史上不明であるが、惟ふに佛教を以て國家的中心とする兄ラルバ、チャン王を倒しその王位を篡奪せんが爲めに、民間に残存する梵教徒を自己の味方に誘引し、その勢力の後援により兩教をして衝突せしめ、兄王の治政に致命傷を與へんとした陰謀に由るものではないかと思ふのであるが、そうした適確なる史料を未だ發見せないので遺憾とする。

(六) 西藏佛教混沌時代

開國王スロン、ツァンガンボ王よりランダルマ王の佛教破壊(899. A.D.)時代までは、西藏の宗教

は佛教特に中觀派に屬する顯教であつて、その中に僅少の梵教が分脈を保持してゐたに過ぎなかつた。蓮華生師の密教は輸入されてゐたけれど、各代の諸王の國教としての方針は飽迄毘奈耶の清規を以て宗教と政治の要諦とし、密教は梵教の信仰に代えしむる俗信の一方便と云ふべき程のものであつて、未だ後代に簇出する坦特羅密教の如きものは、傳播を許されなかつたのみならず、當時印度より招聘さるゝ印度の諸班抵達は大概顯教的大乘教の人師のみで、密教的傳導者は來藏せなかつた。それらの事實は譯經史上に表はるゝ諸學者と、譯出されし諸經論疏等を手にすることに由て確定せらるゝことである。故に開國王よりランダルマ王の迫害時代までの西藏佛教は先づ清淨な顯教のみであつて、坦特羅乘の佛教はなかつたものと言つて差間はないと考へらる。故に西藏佛教が宗派的運動を起すやうになつたのは、ランダルマ王の迫害の起るまでは、未だ起つてゐなかつたので王の迫害後、印度より持戒堅固の持律者河提沙 (Atiṣa) が西紀一〇三八年に來藏し、宗教改革の端緒を開いてから始まつたものと見てよいのである。

王の佛教迫害によりて西藏は闇黒時代と化したのが、王族なるイーシ、オッド (Ye-ges Hlod) 等の熱誠なる護法家は、諸の班抵達、翻譯家を集め三藏の將來と、諸經論の註釋に専心傾倒し、異解異端者を放逐し、人を印度に派し、さまざまの經典、特特羅乘、曼特羅乘を輸入し、銳意佛教の改正と燒失されし諸經論の蒐集と翻譯とによりて、正統佛教派の教理を主張し、異解者は濫りに私議を以

て經と曼特羅との合一的教理を分離せんとし、二者殆ど水火の相容れざるが如く確執論諍した。イーシ、オッド等は是等の諸問題を解決せんとして阿提沙及び羅睺羅掘多等を招聘したのである。

開國王スロン、ツアン、ガンボ王よりランダルマ王までの佛教は毘奈耶を清規とし、中觀佛教派を以て國家的佛教と定めた已外に、曼特羅乘や、坦特羅一乘は採用せなかつた。これは當時來藏したる諸賢龍象が印度摩揭陀國の佛教即ち顯教思想を奉信せるものが多數であつたから、譯經も主として中觀派又は瑜伽派の唯識系のものであつて、未だ祕密乘は多分に輸入せられず、諸王の國家的方針としても顯教大乘とあつたのである。然るにランダルマ王の迫害後は、王統亂れ、燒失された諸經典を補はんとして、護法家が任意に印度に留學し、印度より顯密二乘中、殊に密教部の經典を多量に輸入し、譯出したが爲めに、曼特羅、坦特羅の典籍は簇々輸入せられ、左傾的密教も盛に民間に傳播さるゝに至つた。是れに依てひとしく佛教といふも、その内容は頗る不純なるものが西藏に蔓延せしが爲に、心あるものは殆ど曼特羅との分限を明確に分離せんとし、純なる顯教的大乘教を宣揚せんとする復興主義者が輩出したのである。

然るにイーシオッド等の護法家は、已に經と曼特羅との合一が即ち佛教本來の教理なりと誤解し民間や、諸學者間に、合一的に信せられてゐる此の兩者を分離せんとする運動は反て佛教の本旨に悞るものなりとし、それらの反動的運動を停止せしめんと憂慮するの餘り、阿提沙等を招致したの

である。之を今日の根本佛教上より見れば、經と曼特羅との合一を正統なりとする信條は却つて正義ではなく、經のみ殊に密教に關する諸經典を分離して研究することが、佛陀の眞の精神に叶ふものであるが、西藏では、之を逆に信ずるに至つたのは、當時の印度佛教界は殆ど密教化してゐたが爲めの影響であると考へらる。孰れにして阿提沙の來藏までは宗派の分起はなくして、阿提沙の改革によつて諸宗派が始めて起つたことである。故にランダルマ王迫害以前までの佛教は原始的大乘の顯教であり迫害以後の西藏佛教は顯密混同の喇嘛教と稱すべきである。喇嘛 (Bla-Ma, Anuttara) とは無上師と譯し、各宗派の開祖若は宗派の傳統者に對する尊稱であつたものが、後ちにはその宗派の傳統者の弟子をも民衆によりて喇嘛と呼び倣されるに至つたもので、西藏では佛教といふ名稱の外に、喇嘛教といふ名稱を以ては通用してゐない。

(七) 西藏佛教各宗派の興起

西藏佛教流傳に就ては流傳の前系と後系とに區別することが、西藏佛教々理史を最も明確に叙述せらるであらう。西藏の各宗分派の状態は、宛然佛入滅後に於ける十八部分裂に似て、宗名の多くして教義を異にせるを觀るであらう。或宗派は開祖の名を冠し、或は印度班提達バンディダの傳系に屬し、或は教義を以てし、或は地名を以て表示してゐるなど、一様ではない。ワッデル氏 (Waddell) は舊教

の七派、半改革派の十派、改革派の一派、合計十八派ありとし、是に梵教を加へば二教十九派である。

(1)

- 舊の七派
- (一) ハーツアンバ派 (Iha-Tsani-pa)
 - (二) カルドクバ派 (kar-Rtog-pa)
 - (三) ガーダクバ派 (Na-Dak-pa)
 - (四) ミンドル、リンバ派 (Min-Doi-Glin-pa)
 - (五) ドルゼ、タクバ派 (Rdo-Rje-bRtag-pa)
 - (六) ウルゲンバ派 (Urgen-pa)
 - (七) 餘の舊教派 (其餘の舊教)

(2)

- 半改革
- (一) 薩迦派 (Sa-Skyra-pa)
 - (二) ゴルバ派 (Nor-pa)
 - (三) ジョナンバ派 (Jo-Nan-pa)
 - (四) カルマバ派 (karna-pa)
 - (五) 下方ドゥクバ派 (Duk-pa)
 - (六) 中央及下方ドゥクバ派 (シシ)

- | | | |
|-----|---------|--|
| 十 | 上方ドゥクバ派 | (<i>h h h</i>) |
| (七) | | |
| 派 | | |
| (八) | タルンバ派 | (<i>Talun-pa</i>) |
| (九) | チーグンバ派 | (<i>h Bri-Gun-pa</i>) |
| (十) | カーヂェンバ派 | (<i>h kañ-bRgyud-pa</i>) |
| (3) | 改革派 | (<i>dGe-Lugs-pa</i>) 一名カーダムンバ派 (<i>h Kañ sDams-pa</i>) |
| | グルクバ派 | |

余は爰に清朝仁宗嘉慶六年辛酉二月八日(1801 A.D.)にローザン、ツェヂ、ニヤ(Blo-bZan Chos-kyi Ni-Ma)の著はせる「一切教理の奥義と願望方法をを説明する善釋明鏡」(*Grub-mThaq Thams-cad-kyi khmis Dan hDud-Tshul-la Ston-pa Legs-bCad Cel-gyi-Me-Lon*)に據りて大要を叙説する。

- | | | |
|----|----|---|
| 佛敎 | 前系 | 一、舊顯敎—一切有部宗系 (Thams-cad-Yod-par smra-bali Sde-ba) |
| | | 二、舊密敎 (<i>gSai-Snags Rin-ma</i>) |
| | | 三、新密敎 (<i>gSan-Snags gSar-Ma</i>) |
| | | 四、半改革派 (<i>Atiça</i> のカダムンバ派) |
| | | 五、新敎—宗喀巴(<i>Tson-kha-pa</i>)改革 |
| | 後系 | |

(八) 舊 顯 教

佛教流傳の前系とは、前に叙せし如く、開國第一世スロン、ツァンガンポ王より四代目の藏王チ
デーックタン (Khr'i-Idé sTsu-g-bKran) のとき翻譯事業を起し「百緣經」「金光最勝王經」等の諸經を
譯した。その子ザンツァ、ハーソン王 (K'ai-Tsha Lha-dBan) は戊午歲 (718 A.D.) に生れ、武威四方
に振ひ遠く唐長安を侵略し (763 A.D.) その前年に王は大埴布、菩提薩埵 (mKhan-Chen Bodhi-satva)
又の名シャンターラクシター (Cantarakita; 寂護) を印度より招聘して佛教興隆を謀つた。菩提薩埵
は毘奈耶を基とし、說一切有部派の教理を説き、十善十八界を講説して藏人を教化せしも、頑迷な
る藏人の度し難きを嘆き、一度ネバル國に還つた。王の再度の懇請により師は再び來藏し、十五
年間サムエー廟に留錫した。未歳の時師は印度より一切有部派の比丘二十人を招致した。この時イ
ーシ、ワンボ (Ye-ges dBan-po) 、コン族のルイー、ワンボ、スン (nKhon Khüi dBan-po bSrunis) と
バゴン族のヒロツマナ (Ba-go-re Be-Ro-Tsa-na; Vairocana?)。アーチャールヤ、リン、ツェン、チヨ
ク (Atsarya Rin-Chen-nTso) 等の七人の秀才を選抜して出家せしめ、有部派を學ばしめた。これ
を試験の七人と稱す。サムエー廟の壁面に、舍利弗より師に至るまでの毘奈耶の傳系を描き、說一
切有部系の傳統を明記した。

當時菩提薩埵の來藏せざりし以前から、支那佛教は傳播して、その勢力も可なり旺盛であつて、法幢全藏を壓してゐた。併し支那教學派の教義は主として觀念論に重心をおき、諸行を排し、單刀直入人心の奥底に突入り、佛心を開發せんとするにあつた。曰く教誡に従ひ、法を修し、善行を爲すとも、容易に佛を見る能はず、たとひ善行を積まずとも、成佛には何等の支障なし。要は沈思默想の觀念によつて見性に達するにありと。之に反して印度派は戒法を守らざるものは、佛教の破壊者なりとして排斥した。この佛教優劣諍論を一決せんとして、王はサムエー廟を討論會場に當て、兩派をして討論を開始せしめた。

王は群臣を引きつれ廟内の玉座に登り、手に華鬘を持ちて討論を監視した。そのとき支那のマハヤナ和尚先づ開口して言く、一切事物に對する知覺は、輪廻を結ぶべき原因である。故に善惡何れの知覺をも、ひとしく其を離れねばならぬ。げに「何事も意中に思はざれ」(Ci-Yan Yid-la mi-bSam)、「何も意中に作らぬ」(Gai-Yan Yid-la mi-Byed-pa)。そは無念無作は輪廻より解脱する唯一の善方便である。かの十地(Sa-bCu-pa)の如き布施、持戒等は、是れ漸門教にして、眞に悟る能はざる劣根衆生の爲めの法に過ぎない。心中無作の法は教誡優婆提舍あらば、何を好んで煩はしくも布施、持戒等を要すべきぞ。無念の觀念に住せば、雜行雜修の必要はないと。

是に對して菩提薩埵の弟子カマラシーラは駁して言く。事物に於ける妙觀察智(So-Sar-Rtog-pahi

Ces-Rah)は、是れ菩提に入るべき根源であつて、また法の性命である。故に方便と智慧との合一は佛陀に達すべき要素である。この二者中何れの一を缺除することも、未來佛を證得することは出来ない。事々物々に關する知覺的智慧と諸行兼修の二者中、何れを離ることも未來成佛すべき見道の解脫を證することは出来ない。たとひ觀念に住することも、無上正覺の如きは到庭望むべくもない。この故に修禪の聖典に據りて思惟し、眞實解脫經等の諸々の無垢清淨の教戒、その他あらゆる智慧は覺佛得證に缺くべからざるものであると論破した。この際印度のハイ、イシ、ンホ (Ihahi: Ye-ges dBar-po)は我因明を以て論駁した。爰に於て西藏語に熟練してゐない支那の和尚は、自己の論旨を充分に述ぶることの出来なかつた爲めに、遂に法戰に敗北したのである。王は戰勝の華鬘をカマラシーラに授け、西藏佛教は龍樹の中觀論派を採用することゝして、印支兩派の多年の法論を鎮定した。かくて支那和尚は法幢を卷いて漢土に還り去つたのである。

(九) 舊 密 教

西藏の舊眞言密教はスロンツァン、ガンボ王時代より起つたものなれど、其が尤も旺盛に傳流せられしは、チスロン、デウツァン、ガン王の時代であつた。叙上の如く菩提薩埵の戒律的道德宗教は當時の梵教に對する迷信強き藏民に歡迎せられなかつたから、師は王に勸めて蓮華生師を聘せし

めた。西紀七四七年に蓮師は葛杖那國より來藏し、弟子二十五人と俱に秘密佛教を宣布した。

蓮華生師 (Padma-sambhava) の傳記に就ては、さまざまの史傳あつて一定してゐない。眞言秘密の教法宣承者中、尤も興味深い史料であるも一樣でないから、その説の當否を判定するに苦しむ。

或説に蓮師は來藏後僅かに數ヶ月後に去つたと云ふ。故に師はその短日月間に於て西藏の鬼神妖怪を退治し、サムエー廟に住して諸法を講説したといふ。或は師の退藏の後ち一外道は僞りて蓮華生師なりと稱し、頭に孔雀の羽を挿し、葛杖那、印度ザホル地の風俗を装ひて來藏し、舊教の諸法を説いて弘通したとの説あるも、是は牽強附會の説に過ぎない。或は舊教に關する諸説の大部分は蓮師の後に出了たグル、ツェワン (Gu-Ru Chos-pBai) なるもの、宣傳に依るもので、現今の所謂葛杖那及びザホル派と稱せらるものは即ちこれである。と云ふ。併しグル、ツェワン師は蓮華生師より後代に出で、諸處の洞窟より諸經典を發見したものであるが故に、蓮師の眞言密教弘通とは、その年代に於て相違あるが故に、固よりかの説は信するに足らないであらう。

蓮華生師の密教とは云何なるものであるか、それは確實なる根本史料なく、大概は後世の僞作にかゝる諸書であるから、かの密教の眞意を把握することは困難である。吾人は通俗的に記載されてゐるバトマ師 (蓮華生師) の魔法術に類似せる記述を以て満足せなければならぬ。蓮師は來藏 (747 A.D.) して妖怪、食人鬼神等を退治するに、虚空に十字形鉛を投じて充滿せしめ、空中を駆る魍魎

を散し、サムエー廟に不動蘇迷盧堂と名くる伽藍を建て、そこに師と諸弟子等相會し、瑜伽の三種その他諸典を説いて救濟の法を示しさまざまの奇蹟を示現した。就中ナムカーニンポ(Nam-nkhan Snin-po)は日光に乗りて空中を廻り廻はり、サンゼーイーシ(Sans-Rgyas Ye-ges)は金剛杵を投げて巖石を貫ぎ、チャフ、チョク、ヤン(Rgyal-ba mChog-dByans)は馬頭を變化して馬聲を發し、カルシエン、ツォヂヤル(mkhar-Chen mTsho-Rgyal)は被殺者を蘇生せしめ、バルヂ、イーシ(dPal-gyi Ye-ges)は非人を捕ふるに奴隸となり、バルヂ、セング(dPal-gyi Sen-G)は惡鬼を縛し、ヒロツァナ(Be-Lo-tsa-na; Vairocana?)は智眼を有し、王自らは禪定に入りて不動を呈し、ユチャ、ニンポ(gYu-Sgra Snin-po)は悟通徹底し、ジュニヤ、クマラは神通に長じ、ドルゼ、ドゥチ ヨム(Rdo-Rje bDud-jiom)は風の如く無礙自在を得し、イーシ、ヤン(Ye-ges dByans)は空中を飛行し、蒙古人ハールチャン(Lha dPal-gCan)は豹虎を使役し、ナナン(Sna-Nam; Samakand?)地のイーシカー(Ye-ges mkhan)は鳥の如く空中を翱翔し、バルヂ、ワンチュク(dPal-gyi Bwan-Phyug)は鈎刃を握る瞬間に殺人し、タンマ、ツェマン(Tdan-ma Rise-Man)は不忘術を持し、カフ、バルツェク(skab-dPal-bTseg)は他神通を有し、シエルブ、バルシン(Cul-bu dPal-Sin)は河水を逆流せしむる能力を有し、チャルポ、ロツェー(Rgyal-bahi Blo-Gros)は骨を黄金化する奇術を有し、ツェウ、シユンロ(khyeju-Chun-Lo)は空中の諸鳥を捕攫し、チャンナムケー(Dran-pa Nam-nkhas)は犂牛を捕攫す

るに妙を得たり。オッチャン、ワンチュク (Ho-Bram dPai-Phyug) は魚の如く游泳し、マタン、リンツェン (Rma-Than Rin-Chen) は蛙肉を食とし、バルヂ、ドルゼー (dPal-gyi Rdo-Rje) は山谿巖岩を往來するに無礙力を有し、チャルビ、チャンチュブは、空中に自在に端座し、ランロ、コンチヨク (Lai-Glo dkon-mChog) は雷電を落下せしむる奇術を有すと云ふ。以上の如き奇蹟は只蒙昧無智なる藏民の宗教的信仰の反影としての魔術として受取る外、何等學理的批判の對象とはならないが、今日に至るまで尙藏民間には蓮華生師の秘密的奇蹟として口碑稗史に傳承せられてゐる。これらの密蹟は眞言密教ではなく、一種の修験道的魔術師の行蹟に過ぎない。

曼特羅乘 (gSani-Sniag Theg-pa) の宣布者、法稱 (Ohamakirti) 無垢支 (Vimaramitra) 覺密 (Buddha-ghuya, sans-Rgyas gSdi-ba) 寂胎 (Cāntagarbha) 等の多くの印度班抵達は來藏し、法稱は瑜伽金剛の曼特羅を述べ、無垢友等は曼特羅を云何に採用すべきかの方法を説いた。そして眞言秘密は深義なるが故に、それらの本文に付いては何等論理的説明を施さなかつた。併しベロ (Bero) マ、ニヤク (Rma gNags) マン (gNubs) 等は「普作心經」(kun-Byed Rgyal-po)、「修習集經」(mDo gGonis-hDus)、「神變成就八部」(Sgyu-kPhrul-Sgrub Sde-kRgyad) 等譯出した。

(註) この稱友は藏文「異部宗輪論」を譯した稱友と同名異人である。無垢友、覺密等の諸傳は拙譯タラ、ナータ印度佛教史參照

舊教一般の宗規によれば、佛果成道の階級を立つるに九乗を以てするは通規である。

- 一、聲聞 (Nan-Thos) ————
 - 二、獨覺 (Rai-Rgyal)
 - 三、菩薩 (Byan-Sems) ————
- 應身釋尊所說普通三乘。

舊 教 の 九 乘

- 四、Kriyā-tantra ————
 - 五、U-pa-tantra
 - 六、Yoga ————
 - 七、Mahā-yoga ————
 - 八、Anu-yoga
 - 九、Ati-yoga ————
- 報身金剛薩埵 (Rdo-Rje Sems dPal) 所說の眞言秘密の外の三乘。
- 法身普賢 (Chos-Sku kun-Tu bzau-po) 所說の無上乘。

- a. 事坦特羅 (Bya-Rgyud) ———— 釋尊所說
 - b. 行坦特羅 (Spyod-Rgyud) ———— 大日如來所說
 - c. 瑜伽坦特羅 (Rnal-hByor //) ————
- 外 外坦特羅……
- 内坦特羅……無上坦特羅 (Bla-ma-med-pahi Rgyud) (執金剛がVichā國に於ける所說)

此の無上乘は法身普賢が身語意三業の圓滿清淨によりて法爾に成就せるもので、此土に出現し、

劫波の差別なく、無差別平等に救はんとしての説法なれば、その所説の法は無數無量不可思議なりと云ふ。只僅かに残れるものは印度の瑜伽師の少數者が説いたものだけに過ぎない。左の人々はこの無上乘の瑜伽觀行法を説いた主なるものである。

- 一、歡喜金剛 (dGah-Rab Rdo-Rje)
- 二、吉祥獅子 (gri sinha)
- 三、智 經 (jñāna-sūtra)
- 四、無 垢 (Vimala)
- 五、蓮 華 作 (Padma-kara)

此の無上乘の瑜伽法を傳燈した宗派は左の六派である。

- 一、最勝密意派 (Rgyal-ba dGros-brGyud-pa)
- 二、持明印契派 (Rig-ñDsin bRda-bRgyud-pa)
- 三、人稱三派 (Gan-Zag Sñan brGyud gSum)
- 四、附法懸記派 (bkah-Babs Lun-bstan brGyud-pa)
- 五、天啓藏派 (Lhas-ñPhro gTer-gyi brGyud-pa)
- 六、誓願廣說派 (Smon-Lam gTan-Rgyahi brGyud-pa)

舊教の法は瑜伽傳系を左の如く三派區別す。

- 一、遠附法派 (Rit-bRgyud bKah-Ma)
- 二、近天啓藏派 (Ñe-bRgyud gTer-ma)
- 三、甚深淨照派 (Zab-mo Dag-Snai-gi bRgyud-pa)

この三派は西藏に於て云何にして起つたものとふことは、左の三教理に依止して説明したるに由て興起したのである。

- 一、附法之神變 (hKah-ma Sgyu-hPhrul)
- 二、秘密集經 (hDus-ba mDo)
- 三、心性宗 (sens-Phyogs)

神變秘密心經 (Sgyu-hPhrue gSai-ba Shin-po) は印度の無垢 (Vimara) よりマ、リンツェン、チョク (Rma Rin-Chen mChog) に教へて譯出し、マ、リンツェン、チョクは是をツクル、リンツェンシヨンヌ (gTsong-Ru Rin-Chen-gShon-nu) 々、チェン、チョク、チョン (Gye-Re mChog-Skyon) 々の二人に授けた。この二人は亦ダルゼ、バルチ、チャクバ (Dar-Rje dPal-gyi Grags-pa) 々、札什論布市の北方シャン地 (Shai) のチャルビ、ヨンダン (Rgyal-bahi Yon-Tan) に授け、チャルビ、ヨンダンは諸種の傳系と多くの優婆提合を教へ、ダルゼは衛^{ワイ}と藏^{ツァン}と喀木^{カム}との三地方に秘密藏を宣布せしによつて

其の教派は隆勢に趣き、彼地方に衛派ワイと喀木派カムとの二派を生ずるに至つた。

(十) 舊教の教義

舊教に關する總教理を説明することは容易の業ではないから、爰には只觀念修法と、その教理の一般の見解とを叙述する。

上樂佛を説ける強制ヘルカ坦特羅 (Heruka-Gal-pahi Rgyud) 等の融合法の六種、五種觀道 (Rim-lia) 善惡業報果を説ける道去釋法 (Lam-gyi bGrod-Ishul-bCad) 三階解脫道 (Rim-gSum Grol-Lam) 秘點方便道教理 (gSan-Thig Thabs-Lam-kyi Man-Nag) 秘密集實性修習經 (hDus-pa-mDohi Nan-Sgom) 八旨五道 (Bka-h-Rgyad-kyi Ram-lia) 等の教理を説いて、殆ど舊教の教理に似たるものあり、後代の舊教諸派は是等の教理を採用せしも、その教理を一層研究して究竟に達する能はずして止んだ。併し是等の教理を微細に研鑽し、思考解釋に巧妙を極め、尊重せらるゝものは大究竟派ツォクツェンツ (Rdsogs Chen-pa) である。

大究竟派、又は大圓滿派の名義の解釋——圓滿又は究竟 (Rdsogs) とは、現象界の輪廻と、其解脫法との一切法は、是れ吾人智識作用に依て然るものなれば、この智が空理其者に達せば、現象と

解脱とは何物たるかを知り得べく、従つて内外一切法は畢竟空智内に含有し、究竟圓滿して、一毫も漏らさず、現象と實在との兩界は共にその内に完全に成就せらるゝが故に圓滿派と名けらるのである。換言せば障垢を離れた當體の智、即ち明朗真空の顯現は即ち究竟境なるが故に是れをツォク、ツァン、ホ (Rdsogs Chen-po) 即ち大究竟と言はるゝ所以である。

又一切法は清淨なる智即ち空内に存するが故に、輪廻を解脱する方法は、清淨なる智即ち空性に達することである。この外に最勝なる道はないから之を「大」と名けらるゝのである。大究竟派に三部派あり。

一、心性派 (Sems-Sde)

二、廣大遍性派 (Klon-Sde)

三、優婆提舍派 (Man-Nag-gi Sde)

(一) 心性派の意見——一切現象より抽象的概念に至るまで心の内外に現はるゝ一切法は、是れ心の顯現に外ならない。心は自性的智を生じて一切を觀するが故に、自性的智より他に發現するものないと言ふ。主觀的心其者が空理上に依著して發現するが故に、客觀的概念を生ずといふ。

之に反して大印契派 (Phyag-Chen-pa) は空智と解脱法との合一的教理を教へ、客觀は心の發生的彼岸の假設投影なりと云ふ。これ心性派と稍似て非なるものである。

(二)廣大遍性派の意見——一切法は法性普賢 (Chos-Nid kun-tu bzai-pohi Idon) の顯現に外ならぬ。法性は一切を盡くして餘すものはない。この外に顯現するものはない。虛空に等しいものである。此の法性以外のものより一切法の發生するものあらば、それは消滅的のものであらねばならぬ、虛空に等しい法性は、諸想像力の及ぶところではないもので、思考を離れ、修圖を脱したる空性に到達せんとするものであり、明朗なる空と空性より顯現する智慧との二性合一に依て、光明赫々たる金剛の光體を證得す、かゝる最勝道に住せるものは、即ち慧身を得せるもので、是れを金剛位者 (Rdo-Rje Zan-da-pa) と稱するのである。

(三)優婆提舍派の意見——捨つべき煩惱と悟るべき解脱との二法を離れたる無二平等の智慧に由て輪廻及び涅槃の一切法に對し、諸法空なる觀念と、煩惱と解脱とを離れたる實性とに導く。この實性究竟に到達せば、輪廻と解脱との何れにも分割從屬せない清淨智は、諸法皆空なる當面に歴然として顯現するであらう。この清淨智即ち空智が連續的活動心體を成就する。かゝる最高の状態は即ちこれ解脱の究竟地に達せるもので、火の燃ゆるが如く、明朗赫灼たるものである。この究竟解脱地に到達するには超越的修法即ち心的思考の一切を離れ、一切空性上に對象を顯現することであるかくして智慧の光體を得るに至る。法の當體即ち空性は顛倒の一切現象を離るからして、身語意三業の一切の粗細は所證の佛體と智慧との實性中には何等の支障とはならない、只赫灼たる光體を得

るのみである。その所證の體には數種あり、曰、

- (a) 自體空 (又自性我 ; No-Bo. Ka-Dag)
(b) 自性自成 (Rañ-bShin I-hun-Grubh)
(c) 慈悲普遍 (Thug-Rje I-hun-kyah)

(a)自體空とは、自性の状態に達し、常見の措定すべき根據なき空性を云ふ。(b)自性自成とは彼の空體即ち光明にして障礙なく、執着すべきものなく、空性が光明體として何等の作爲をも施さず、自然に成就するを云ふ。(c)慈悲普遍とは、彼の空體は清淨なるものと、然らざるものとに論なく、總てに於て普遍的に顯現するが故に慈悲普遍と云ふのである。それ故に、

(a)は智空無差別。(b)は明空無差別。(c)象空無差別となる。

又心(Sems)と明(Rig)との差別的意義——心とは無明に覆はれて常に寂定ならず、種々想像を廻らし、忽然念起的性なるが故に、疑心逡巡の想を生ずるを意味する。明とは無明に覆はれざる心的作用によりて主客兩觀を離れ、明瞭空理にして無染なる即空を證るの謂ひである。

心が概念を起し、感覺を生ずるは即ち輪廻の原因である。心の自性が即空に達するは涅槃解脱である。輪廻と涅槃との二は心の自性即空性の内容として何等差別的原因がないから、輪廻と解脱と

は差別であると謂ふべきであらう。心に概念を起すも、それは空にして、又心性の空なるを認めらるであらう。この心と空とは不二不異の實性である。故に一切法は空智の顯現に由て證悟するが故に是を稱して漸悟的智性合一量と名くるのである。(Rim-gyis-pahi Rig-pa No-hPhrod-pahi Tshod)。

又冥想觀念法に依らず、各教師に従ひ直ちに智の實體を證得し、その顯然明朗なる空智を以て一切法を證るを稱して頓悟的智性合一量(gCig-car-pahi Rig-pa No-hPhrod-pahi Tshod)と名づく。たとひ現生に於て觀念を修し空智を顯現せしめんとするも、其目的を達せずして空しく死することも、その人や死の「中有」を超えて悟るが故に、之を超邊智性合一量(Thod-Rgal-bahi Rig-pa No-hPhrod-pahi Tshod)と名くるのである。

以上の教理を略言せば、觀念修法に依て各自の智性を清淨にし明朗即空たらしめ、一切の善惡邪正の思念を離れて空智を顯現すべきである。かく冥想する法は即ち是れ大究竟派(Rdsogs-Chen-pa)の觀念修法の要訣である。これを蓮華生師の無上密意成就法(gGoris-bCud Bla-na-Med-pa)と名くるのである。

(a)空の第一原理……第一原理の空は輪廻を起して解脱を得べき心に接せず、顛倒妄念に掩はれず只自性の状態、即空を明かに顯現し、大誤にも關せず、悟道にも預らず、一切不成にして、亦

一切生斷である、是を空の第一原理と云ふ。

(b) 修習法の諸道……第一原理と合一せる空智の顯現を怠り、他の發現の場合に善惡の思考と、不善不惡の中道思惟との三思を離れ、清淨虛空の如き光明中樞を名けて道と云ふ。

(c) 證果……かの道の一切功德の性能を發揮して無明と大過とを根本より拂ひ去り、清淨なる法性を顯現せしむるもの之を證果と名く。

大究竟派の所依の論典は左の三部である。

(一) 廣大無邊性小義說 (Chun-pahi Don-klon)

(二) 甚深金剛優婆提舍 (Rdo-Rje Zah-pahi Man-Nag)

(三) 甚密眞心優婆提舍 (Rab-Sems Zah-pahi Man-Nag)

(四) 吉祥坦特羅經 (dPal Rgyud mDo)

右(一)の(一)とは Vairocana が本(地(Span))のミン(ン)ボ(寺(Mi-phan mGon-po))に於て説いたもので、之を Dharmabodhi に傳へ、彼は彼の弟子及び Myan Dharmasinha 等五人に傳へ、甚密金剛空法を宣傳した。(三)は Vimaraitā が當時の藏王 Myan Tin-ŋ Dsen bzai-po 々に説き教へたものである。(四)は Smṛti なるもの、チ、スロンテウツァン王(kri Sron-ldeju-bTsan)時代(718 A.D. 生)の譯出であつて、之を所依の經典として宗義を交へるを眞言秘密の舊教(Saṅ-Siag Rin-

Ma) の稱也。

(十一) 阿提沙の改革

ナー、イーシ、オッド(Lha Ye-ges-Hod)は阿提沙(Atiśa)を印度より招聘し、阿提沙は來藏(1026 A. D.)し、十七年間西藏各地を巡錫し、専ら、西藏佛教の腐敗を憂ひて佛教改革を叫びぬ。阿提沙(Atiśa)の本名はバル、マルメザ、イーシ(dBal Mar-me-mDsad Ye-ges)と云ふ、吉祥燃燈慧と譯出すべきである。宗喀巴の著 Lam-Rim Chen-po に阿提沙の布教の一般を述べて曰、

「阿提沙はガリー地(mNa-Ri)に到着し、佛陀の教法に依り西藏佛教の腐敗を刷新せんとして諸佛に祈念し、宣布の教義は經と曼特羅との一切の眞髓を綜合し、新教開祖の綱要とし、「菩薩道燈論」(Byan-Chub Lam-gyi Sron-ma)を著し、「中道解脫論」を説明せる「道燈根本疏」(Lam-Sgron Rtsa-hGrel)と、「中道優婆提舍根本疏」(dBu-mahi Man-Nag Rtsa-hGrel)あり。彼はガリー地に三ヶ年駐錫し、ニータン地(Shi-Thän)に九年、衛洲、^{ウイ}藏洲に九年間を送り、西藏佛教を一新し、カームバ派(bka-h-gDams-pa)を樹立し、舊教を排し、將に衰滅せんとする正統佛教の命脉を挽回するに至つた。彼は晩年にニータン地(拉薩の西南十哩)に隱栖し、午歲九月十八日(1042 A. D.)に七十三歳にして示寂した。カームバ派(bka-h-gDams-pa)は阿提沙を開基としてゐる。この派の阿提沙の

傳記によれば左の如くである。

この派の「法源明燈論」(Chos-hi-Byun gSal-pahi Sgron-me)に據れば、阿提沙(980 A. D. 生)は印度パンジヤブ州のザホル地(Za-Hor)地のGaur王族家に生れた。幼にして内外兩教を研究し、奥義を極め、長じては戒定慧三學に達した。彼は佛陀入滅後の教團の分裂の經路を尋釋し、根本二部の分裂より十八部に分裂せる佛教々理史の發達の狀態を究め、徳高く學識一世の師表となつた。彼は中年に及んで摩揭陀國のナムノン寺(Ram-gNon)及び戸羅寺(Cita, Tshul)等を管理し、教團中の長老となり、多年多くの學徒を養成した。彼は多くの上樂神(Yi-Dam)を觀じ、三藏併に坦特羅に精通し又彼は西紀九世紀より十世紀間に佛教の旺盛なりしペグ國(Pegu)即ち西藏の所謂金地國(gSar-Gin)に遊び、人類救濟に奔走し、之に由て同國民は彼を福德菩薩の來現なりと尊稱したと云ふことである。(余の譯出したる阿提沙の著「菩提道燈論」参照)

阿提沙の依用した龍樹の著書、

- 一、「中道根本般若」 (dBu-ma Rtsa-ba Ces-Rab)
- 二、七十空性 (Ston-Nid bDun-Cu-pa)
- 三、根本寶鬘 (Rin-Chen Phreñ-Ba)

(十二) カーダムバ派の教義

阿提沙の來藏に依て西藏佛教を改革して別に一派を樹立せしものはカーダムバ派 (bKah-g'i Dams-pa) である。カーダムバ派とは云何なる教義を有してゐるやを檢剖するに、宗喀巴ツォンカバが當時の碩學として世に重せられてゐたカーダムバ派のチャンガ地のリンツェン、ヘル (Sgyan-Sha Rin-chen hPhel) なるものに問ひし其意義に據れば、釋尊の所説の教法は極めて多くあるも、就中一法を取つて他を廢することは不可である。總て是れ佛陀の直説法なる以上、その總てを依用信順することは肝要である。この意味にて佛陀の教義を宣布するが故にカーダムバ派と名けらるのである。開祖阿提沙は經律論三藏を説くに、所對の機根を大中小の三種に分類し、人間の智能の高下優劣に應じ、適宜に三藏を宣布した。これ阿提沙の立教開宗の要諦であると。

菩提道燈論の要抄

阿提沙の著はせる「菩提道燈論」(Byah-Chub Lam-gyi Sgron-ma) の概要を左に摘抄して、彼の西藏佛教改革を叫びし宗教的根據を一瞥することゝせん。

第一段 布施の必要……善良なる衆生の最上菩提を願求する者は、喇嘛 (Ba-Ma: 無上を譯す) に

依て教法の清淨なる方法を説明せらるゝが故に、持戒、懺悔、佛畫、法塔、妙法の現利より香花等の供物に至るまで云何なる財寶をも献供せよ、凡そ善良なる行爲と稱せらるものは七種の供養である。されども菩提心の究竟に達するには不退心を以て正しく三寶を信するにあり。膝頭を地に着け合掌せんには先づ救主を三拜せよと。

「持戒の必要を述べて……入定者は制戒に屬せなければ如實に誓願を増長せしむることは出來ないであらう。完全なる菩提制戒を増上ならしめんと欲し、それが爲めに努力せば、それは眞實に得らるであらう。七種解脫戒に就て、常に他人が制戒を持する中に於て菩薩戒法こそ幸福を招くものは外にない。七種解脫戒は如來の所説にして、これによる吉祥淨行は最上のものである。比丘等よ、戒法を清淨に願へかし、菩薩地の戒持品を説き、能く教理に達せる尊い喇嘛師に従ひ、制戒を受け制戒の儀軌に熟達し、明かに何の制戒にも住し、制戒の忍耐慈悲を有たねばならぬ。そは努力に依るが故に、若し是の如き喇嘛師を得なかつた場合には他の制戒を持つ者に従つて正しき法を授からねばならぬ」と。

「瑜伽の必要を述べて……是の故に禪定聚品中に説ける種類に住し、適應なる一修習に於て意をして能く住せしめよ。瑜伽を成就せば、諸の神通を得るであらう。般若瑜伽を離れば、障礙を滅することは不可能である。この故に煩惱を識れば障礙を餘りなく離るゝが故に般若瑜伽を常に方便を

以て修習すべし。方便を離れたる智慧と、又智慧を離れたる方便とは不可なり今此の二者は何れも結合せねばならぬ。この故に二者は分離してはならない。云何なる智慧、云何なる方便たりとも、そこに疑念を狭むは不可である。そは分離である。方便と智慧との分別を明瞭にし、般若を以て煩惱を捨離することは、布施の波羅密等、一切諸種の善法は諸佛の便宜に説き給ひしものなれば、自己自づから方便を實行する能力を以て智慧を完全に修習せば、遂に菩提を得るに至るであらう」と「無我に關する説明……單に無我を觀念するもそはよろしくない。五蘊と一切廣褻性の物は無生であると悟り、自性即空なりと識らば、即ち智慧を完全に説明せらるであらう。「有」は生ずべき種子なく、「無」は空花に異ならない。過失は二者を聯結するが故に、二者とも亦生することはない。物質は獨生せない、亦他との二者よりも生せない。無因よりも生せないから、自性(No-Bo-Nid)は無自性である。又一切諸法は一多相即せば、自性は無分別であるから、無自性は眞であり、七十空の智と、尙根本中道に由て物質の自性は空性を成すのである」と。

「曼特羅の必要を述べて……訓誡と明呪とに就て説明せんに、一切諸法は無生であるから、眞に無自性を成して無分別(Rnam-rog-Med)を觀せよ。かく觀せば漸次に暖溫定(Drod)を得て歡喜(Rab-dGan)等を悟るであらう。菩提を成就するは敢て長時を要せない、呪力(Shags-Thu-Nid)を完成せば、寂定と廣大普邊定等を得て、寶瓶成就等の八大成就法を遂行し得らるべき法力を顯現し、

「安穩菩提聚を成すべきである」と。

又行修等の根源を説明せんに……若し秘密呪文の行を望まばその時は阿闍梨の灌頂(dBan-bSkur)を要するから、寶物等の布施を献供し、尊重して喇嘛(即ち無上師)を敬ばせよ。かくて阿闍梨より完全に灌頂を授かるであらう、げに一切罪惡を清淨にするものは悉地を成就するの時機に達するであらう」云々。

阿提沙の弟子ロムトン、チャルビーチェンネ (iBlom-Scon Rgyal-bahi Byun-gNas, 1002 A.D.) は説明して言へり。曰く、カー(kah)とは、經律論の三藏である。ダムバ(gDams-pa)とは、衆生の機能に大中小三種あり、是等の機能に相應すべし佛陀の金言を傳布し、如何なる衆生も善く信順し得られ、解脱の目的を達し得らるゝの義であること、これによりてカーダムバ派の教義の一般を推知せらるであらう、此派は阿提沙を開基とし、ロムトンは之を傳承し、腐敗弊害百出の舊佛教に對し、清涼淨純なる道德的宗風を宣傳して阿提沙が新宗教を樹立したる宗風を擴張盛大ならしめ、以てカーダム派の基礎を確立した。

ロムトンの三大弟子チャンガワ(Spyan-Sia-pa)、『プーチェンバ』(phu-Chun-ba)、『ボトバ』(Bo-to-ba)は師の教義を繼承し、斯宗の擴張に盡力し、學徒を教育し、専ら濁汚せる藏民の宗教心を洗ひ、佛

陀の金言を以て藏民を涵養した。

カーダムバ派の本尊佛は釋迦・觀音、救護佛母(Tara)、不動明王(Acala, Mi-g-Yo-ba)である。カーダムバ派の教理に就て……ロムトンバは説明して言く。一切の教法に依て菩提の道を教へたものは、我が師阿提沙のみである。ナルツョル、ツェンボ(Snar-hi-Byor Chen-po)言く、優婆提舍を充分に知り究むるは容易の業ではない。只佛陀の命令は一切の優婆提舍を研究して始めて知りえらるであらう。ゴンバ、ソンツァン言く、毘奈耶は曼特羅の補助であつて、曼特羅はこれ毘奈耶の補助である。さらば一般佛陀の教法に對して取捨の見を離れ、總て是れ佛陀の教法たる已上は、等しく人類が成佛すべき方便としての所説なれば、佛説としてカーダムバ派に集められてゐないものはない。故にその中に於て取捨是非すべきものなしと知るは即ちカーダムバ派の教義と知るものと言ふべきであらう。

カーダムバ派の教義は大別して三とする。一に本文の奥義(gShun)、二に勸言(Avādāna, gDams-Nag)、三に優婆提舍(科簡)(Uradzga, Man-Nag)の三種である。

第一の本文奥義に三義あり。一に見道の説明(Uta-ba Ston-pa)、二に修道の説明(Spyad-pa Ston-pa)、三に見修二道合一の説明(gNis-ka Zuh-hi-Brel-du Ston-pa)と云である。第一は阿提沙の説ける二諦道と中道義の優婆提等である。第二は修集燈(Spyod-bSdus Sgrom-ne)と修習心過程法と、戒律

作法等である。第三は菩提道燈これである。これらのものは經律論三藏と、事坦特羅と、行坦特羅と、瑜伽坦特羅と、無上瑜伽坦特羅との四種坦特羅と、是等の注釋よりなるもので、一字として捨棄すべきものはない、一切は等しく衆生救濟の方便として述べられたものである。宗喀巴の著「菩提道燈論」に説明して言へるあり、阿提沙の説いた教理は多くあれども、カーダムバ派の根本要義は「菩提道燈論」に攝在し、經と曼特羅との内容精髓を綜合し、教理説明の尤も完全なるものである云々と。カーダムバ派所依の經論は左の如くである。

- 一、菩薩地 (Byah-Sa) (十地經)
- 二、莊嚴經 (mDo-Sde-Rgyan)
- 三、三學集 (bSlab-hDus)
- 四、修道法 (Spyod-hJug)
- 五、三十四本生譚 (Skyes-Rabs So-bShi)

この中、三學集と修道法とは、見修二道の合一即ち智慧と方便との合一を示すもので、その餘のものは菩提心の修道を説明せるものである。

カーダムバ派の修法中、主要なる勸誡 (Avadana, gDams-Nag) は心性を清淨にする教誡であり、之に二種あり、一に他悟的發菩提心、二に自悟的發菩提心である。この派の重なる所依の經論は左

の如し。

- 一、一般大乘教經 (Theg-Chen-gyi mDo-Sde Spy'i)
 - 二、華嚴經 (mDo-Sde Phal-po-che)
 - 三、根本寶鬘 (後龍樹造) (Rin-Chen Phreñ-pa)
 - 四、如意寶珠夢話 (Rmi-Lam Yid-bShin Nor-Buñi gTam)
 - 五、衆生悅樂偈集 (Sems-can mGu-Bañi Tshigs-hCad)
 - 六、學行二法 (シタン著 Shi-ba-lha (bSlab Spyod gÑis)
- カーダム派の心淨修法を實行する修習法の七作法は、各口傳を授けて筆記せしもので、之をカーダム派の心淨七義 (Blo-Sbyon Don-bDun-Ma) と稱す。この派の觀法上主要なる教義を左に列擧す。
- 一、修習前觀法者心得及其作法 (Shon-l'iGro-Rten-gyi Chos-Sems-pa)
 - 二、根本菩提淨心 (dNos-gshi Byañ-Chub-kyi Sems-Sbyon)
 - 三、惡緣成菩提道 (Rkyen-Nan Byañ-Chub-kyi Lam-du-bSgyur)
 - 四、一生確知憶念說 (Tshe-gCig-gi Nams-Ten Dril-nas bStan-pa)
 - 五、心淨量 (Blo-l'iByois-pañi Tshad)

六、心 淨 誓 語 (Bio-Sbyon-gi Dam-Tshig)

七、心 淨 學 法 (Bio-Sbyon-gi bSlab-Bya)

この「心淨七義」は觀法上氣息の出入に依りて内より諸佛に供養し、外より諸佛の冥助を仰受するの觀法にして、これ即ち深密神變の修習法であつて、他の觀法よりも意義深くして最勝である。阿提沙のカーダムバ派に基いて改革を完成したる宗喀巴(Tsoñ-kha-pa)は、此「心淨七義」の勸誡を見て嘆稱措く能はず、この教義を傳承して常に弟子達に教授した。

カーダムバ派の本尊は左の四尊である。

一、釋迦牟尼佛 (Muni, Thub-ba)

二、觀 音 (Spyan-Ras-g-Zigs)

三、救度佛母 (Tārā, Sgröl-ma)

四、不動明王 (Acala, Mi-g-Yo-ba)

本宗所依の經律論の三藏と、對崇の四佛とを總稱して佛法七持 (Lha-Chos bDun-I-dan) と云ふ。

阿提沙の來藏以前に於て、西藏は曼特羅 (mantra, Stags) は亂用され、腐敗の極度に達し、當時人民は酒氣亂行の弊に陥り、祕密修驗者の跋扈專横するところとなり、眞正の佛教は殆ど西藏の地

を拂ふてゐた。このとき阿提沙は來藏し、曼特羅の亂用を禁じ、男女交會的秘密修法は凡庸の爲すべき修法ではない。凡庸以上の有徳の喇嘛にして始めて此の秘法を修するを得べしとて、一般に曼特羅修法を嚴禁した。その弟子ロムトンバも彼と同様に西藏人に秘密上樂佛の修法を嚴禁した。阿提沙がロムトンバ (ñBlon-Ston-Pa) に授けた秘密眞言は左の如し。

一、智慧男坦特羅秘密集 (Pha-Rgyud gSani-pa ñDus-pa)

二、方便女坦特羅上樂佛輪 (Ma-Rgyud hñhor-lo bDe-mChog)

三、四種坦特羅優婆提舍 (Rgyud-Sde bshin-Man-Nag) (見、修、瑜伽、無上瑜伽)

四、一般無上坦特羅優婆提舍 (Bla-Med Spyñhi Man-Nag)

五、究竟成心優婆提舍 (mThar-Thug bGrub-Shin Man-Nag)

ロムトンバは叙上の眞言秘密を傳承し、經と曼特羅とを同一し、その教理を大成した。當時この眞言秘密は一般民間に普傳せなかつたけれども、その眞言秘密の教理はカーダム派の根據として教へたのである。宗喀巴はこれに依て「菩提道燈論」(Byan-Chub Jam-gyi Sgron-Me) と、「菩提段道論」(Byan-chub Ram-jim) との二部を著し、經と曼特羅との要義を選擇し、この二者合一の原理を發見して、究竟的最上教理を創造した。宗喀巴の新教改革は蓋しこの阿提沙の半改革的事業の大成者である。

阿提沙のカーダムバ派の教理より左の三派を分裂した。

一、カーチュェン派 (bKah-bRgyud-pa)

二、薩迦派 (Sa-Skyaya-pa)

三、ゲダンバ派 (dGe-lDan-pa)

(十二) カーチュェンバ派

カーチュェン派 (bKah-bRgyud-pa) の開基はホチャク、マルブ (lho-Brag Mar-pa) なるものが、印度に遊學し、阿提沙に師從して學んだ。カーチュェン派を確定したものはダクボ、ハーゼ (Dvags-po lha-Rje) である。阿提沙の第一の弟ナルヂョル、ツェンポ (Knal-tByor Chen-po) の弟子にチヤ、ヨンドク (Rgya Yon-bDag) なるものあつた。ダクボ、ハーゼは彼に従ひカーダムバ派の教理を學んだ。その後ミララバ (Mihalapa) に従ひカーダムバ派の空智と解脱法とを合一せる教理即ち大手印法 (phyag-chen) を聞き、カーダムバ派の教理と、大手印法とを合一し、是を命令手印法 (bKah-Phyag) の合一的教理と稱した。ミララバは此の合一的教理によつて「解脱段道莊嚴論」(Lam-rin Thar-Rgyan) を著した。ミララバの弟子ロゴンバクモチュ (lGro-mGon Phag-Mo Gru) はダグビシ、ドムン (dGe-bCis

Dol-pa)よりカーダム派の教理を學び、「解脫段道莊嚴論」の註釋を著した。

カーヂェバ派の教理の眞髓を稱せらるる大手印法を、莊嚴經 (mDo Sde Rgyan) を、修道法 (Spyod-hjug) を、三十四本生譯 (Skyes-Rabs So-b-shi) を、象山平坦論 (Glan-Ri Thani-Ba) をの五法は、共に大乘法に於ける菩提心の優婆提舍を説ける精華であつて、何れもカーダムバ派の法系より分流したものである。

薩迦派の班禪^{パレンツェン}ツヤミ、ヤン (hJam-dBpans) は、ネウ、ズルン地 (Snehu Zur-pa) のチボ、ン (Spyi-po lha) なるものに就てカーダムバ派の教理を研究した。故に此の班禪が説ける普通大乘教の教法は、總てカーダムバ派の教義に基く。後代薩迦派のものは皆此の派の宗風を採用した。殊に阿提沙の靈感化身と稱せらるる新教改革者宗喀巴 (Tsong-kha-pa) は、その教理の一斑を、大堪布ナムカー、ヂャルツァン (Nam-mkhah Rgyal-mTshan) を、ツェチャブ、ザンボ (Chos-Skyab bZan-po) の二人より阿提沙の著「菩提段道論」(Byan-chub Ram-Rim) の講義を聞き、大に悟るところあつた。後ち一派を起し、舊教に對抗せんとすの動機を起した。是れが爲めに彼は「菩提段道論」を註釋し、更に「大菩提段道論」と「小菩提段道論」との二部を著し、自己の新宗教に對する立教開宗の要義を發表したのである (1407 A. D.)。宗喀巴の新唱したゲルクバ派の教義もまた阿提沙のカーダムバ派に基き

中道教理と、眞言密教との綜合要義であつて、カーダム派の教理以外に出づるものではない。故に多くの西藏佛教史家は、宗喀巴の newly 創唱せしゲルクバ派 (dGe-lugs-pa) は新カーダムバ派たりと稱してゐる。

カーヂェバ派に二派分裂した。一はマルバ (Mar-pa) の傳系に屬するカーヂェバ派、二はケーチェブチェンボ (mkhas-grub khyuns po) の傳承せしカーヂェバ派とである。

(十四) マルバ、カーヂェバ派

マルバ (Mar-pa) は執金剛より次第に傳承してテロク (Telo'ka) とナーロバ (Nalopa) とを経てマルバに至る傳系であつて、此派に屬するものを總てカーヂェバ派即ち命令の傳系派と稱せらる。

(一) 命令降下の勸誡に於て、テロバ (Te-lo-pa) の傳系に四種あり。言く、一、祕密集 (gSan-hDus)、二、四種坐法 (gDan-bShi)、三、六法幻身 (Chos-Drug-gi Sgyu-lus)、四、死の命令降下 (hPhos-Bahi bkah-Babs) である。この派の菩薩より人師に至る傳系は左の如し。

- 一、執 金 剛 (Rdo-Rje hChan, Vajrapani)
- 二、因陀羅普稀王 (Rgyal-po Indra-puti) (蔦杖那王)
- 三、龍幻化瑜伽母 (Klu-Yis Gyur pahi Rnal-hByor Ma)

四、毘須羯爾婆地主 (Sa-bDag Vicukarva)

五、薩羅訶 (Sa-Ra-Ha)

六、龍樹 (Klu-Sgrub; 後龍樹、二人龍樹中)

七、テロハン (Te-Lo-pa)

(二) 犬幻化 (Sgyu-ma Chen-po) ㄆ 六法夢道 (Chos-Drug-gi Rmi-lam) の二法を傳承したものは左の如し。

一、執金剛 (Rdo-Kje hChan)

二、智多枳呢天 (空行母) (Ye-Ces mkhah-hGro-ma)

三、ククリン (ku-ku-Ri-pa)

四、ツアルマ、ン (Tsa-Rma-pa)

五、テロバン (Te-Lo-pa)

(三) 上樂佛等の智慧女坦特羅 (bDe-mChog-Sogs ma-Rgyud) ㄆ 六法の光明 (Chos-Drug-gi Hlod-gSal) の傳系者は左の如し。

一、執金剛 (Rdo-Kje hChan)

二、金剛手 (Phyag-na Rdo-Kje)

三、 トンビ、ヘーンカ (Tamvi Horuka)

四、 ビナ、マヂェラ (Bhina-Vajra)

五、 ラ ヴ ヴ (Lavapa)

六、 テ ロ ヴ (Te-Lo-pa)

(四) 歡喜金剛法 (dGyres-pa Rdo-Rje) ㄹ、臍部即ち内心に溫氣を含蓄して、全身を溫暖せしむべき修習法、即ち溫氣修習六法 (Chos-Drug-gi gTum-Mo) の傳承は左の如し。

一、 執 金 剛 (Rdo-Rje hChan)

二、 金 剛 手 (Phyag-na Rdo-Rje)

三、 無支金剛 (Yan-Lag-Med-pahi Rdo-Rje)

四、 蓮華金剛 (Padma-Vajra)

五、 多枳呢賢劫母 (Takini bkai-pa bZai-Mo)

六、 テ ロ ヴ (Te-Lo-pa)

(十五) ケーチュブ、チュンボ、カーヂユパ派

ケーチュブ、チュンボ、カーヂユブ派は、始めケーチュブ、チュンボ (mkhas-grub khyuns-po) は

人の智慧多积呢母より命令降下を受けた勸誡に基いて創説したもので、此派に屬するものをケーチ
ユブ、チュンボ、カーヂェバ派と稱す。此派に二派を分出した。

一、シャンバ、カーヂェバ派 (Çaṅs-pa bKah-bRgyud-pa)

二、ダクボ、カーヂェバ派 (Dvags-po bKah-bRgyud-pa)

シャンバ、カーヂェバ派は、ケーチユブ、チュンボよりの傳承であつて、始めケーチユブ、チュンボは少年のとき梵教(Bon-po)を學び、造詣深く、中年にしてネパール國に遊び、スマティ(Su-ma-ti)なるに師從して語學を究め、後ち印度に遊學した。彼は生涯五十年間印度、ネパール國、西藏に往來巡錫した。彼の門下多く、その中優秀なるもの一百五十餘人に及び、經と曼特羅との真髓を語得した。此派の詳解は略す。

(十六) ダクボ、カーヂェバ派

ダクボ、カーヂェバ派(Dvags-po bKah-bRgyud-pa)は、マルン(Mar-pa)の創唱による、始めマル
バはブータン國に遊び、ブータン語を學び、次で印度に三度、ネパール國に四度巡錫した。そして
彼は班禪ナロバ(Pan-Chen Nha-Ro-pa)、吉祥智藏(dPal Ye-ges Shin-po)、寂賢(Shi-ba bZan-po)
等に就て研究を積み、祕密集等の智慧と方便との二瑜伽坦特羅に關する簡料を學び、その奥義に達

し、特にナロバとマイトリバに師従し、空智と解脱法との合一的大印契の教理を極めて還藏し、多くの門下を養成した。彼の門下にして有名なるものは、一ゴク、トン、ツェク。ドルゼ (K'ing-Ston-Chos-Ska Rdo-K'je)、ニルトン、ワンギ、ドルゼ (mChur-Ston dBa-gi Rdo-K'je)、ニメートン、ツォンボ (Mes-Ston Tshon-po)、四ツラ、ンブ (M'i-Ia-Ras-pa) の四名である。右の中、第一、第二、第三と次第に傳承して、祕密集法、歡喜金剛法、四種坐法、摩訶摩夜法等の坦特羅を弘通した。ツルトン、ワンギ、ドルゼは祕密集法をブトン、リンボツエ師 (Bu-Ston Rin-po-Che; 1288 A.D. 生) に傳へ、次で宗喀巴 (1417 A. D.-14178 A.D.) に及んだのである。

(a) ミラ、レバ略傳

ゼン、ミラ、レン (K'je-Tsum M'i-las-pa) は藏洲の西部ガール地 (Nah-Ri) のグンタン (Gun-Thai) の僻村に生る。幼にして父母に別れ、饜食なる叔父、叔母に養はれ、家財を横領せられて悲惨なる生活を營んだ。彼は叔父母の殘酷なる處置を怨み、復讐を爲さんと欲し、怨敵退散の祕密修法を學び、この密修を修して彼等を呪殺した。後ち彼はその罪業を悔ひ、マルバ (Mar-pa) に師従した。心骨を碎き、難行を修し、修習修禪し、遂に、その身心に最勝の奧義を成就した、彼は西紀二〇二に死した。彼に優秀なる二大弟子あり、一はダクボ、ハーゼ (Dvag-po lha-K'je)、二はレーチュン

ズ (Ras-Chuni-ba) である。

ダクボ、ハーゼは青年にして醫術を學び、技藝に熟練した。妻を迎えてより二十年経て妻の死亡に遭ひ、悲哀に沈んだのである。彼はカーダムバ派のシャバ、リンバ (Ca-ba Glin-pa) に従ひ具足戒を授かり、チャユルバ (Bya-Yul-ba)、トウク、ルンバ (Stug Ruum-pa)、チャクリ、ゴガバ (Icag-Ri-Go-kha-pa) 等に師従してカーダムバ派の講義を聴いた。彼は後ちミラ、レバの名聲を慕ひ、訪來り、師従し、一切講説を授けられ、靜觀悅證を完全に修行し、カーダムバ派の菩提段道論 (Byan-Chub Ram-Rim) のミラ、レバの大印契法 (Phyas-Chen-gyi dDams-pa) を一度に會得し、「解脱莊嚴道品」(Ram-Rim Thar-Rgyan) を著はした。これよりカーダムバ派の印契法の二流を合し、大印契法の合一整調者にして、名聲を揚げた。此のダクボ、ハーゼに屬するものをダクボ、カーヂェバ派と稱す。

(b) ダクボ、カーヂェバ派の教義

ダクボ、カーヂェバ派の根本の見解は、中道解脱 (dBu-ma Thal-hGyur-Ba) である。この教義に屬する重なる人々はナロバ (Narpa) と、マイトリバ (Matripa) である。彼等は見修二道と坦特羅とに通達し、就中正確なる理解を有するものはマイトリバである。彼は東方恒河の邊に來り、彌勒尊の

慈悲に依り、根本の無生忍を悟り、心即空性を證り、妄念の離れたる自性を觀じ、三身を拜し、是に依て心的妄念を斷じ、かくて彼は心の本性と名けらる眞理に依て宜なる心の法性を開顯し、自ら成道を増進し、修習に由て法身の光明を覺知したと云ふ。

彼は單に中道のみを説いたのではない、主としてバルダンダワ (dPal-tsan Zhi-ba) の宗義をも説いた。そは自己の壽命の實性より自性を知らんと欲するに、有相に非ず、無相に非ず、無上語によつて莊嚴せられない中道は即これ唯中である。かくて有相經部と、無相異說部と、聲聞部と、有相の眞相と、無相の虛相との唯心に由て實相の意義を悟ることであると。

ナロン (Naropa) は亦自稱 (Za-ba Grags-pa) の宗義を採用し、彼の一般傳系の註釋書なる「明燈隨順」 (Sgyon-ma gSal-bahi' Rjes-i-brans) には龍樹の論義を釋し、龍樹、阿利耶提婆、龍智、釋迦支 (Cākya-b-Ces-g'Nen) 等の論義に依て釋してゐる。それらの見解は前叙と同一である。

(c) ゼツン、ミラの教義

ゼツン、ミラ (Rje-bTsun Mi-la) の諸頌に於ける教義は、大概中道解脫說派と一致すと云はれ、一切智の諸佛は「一切有」 (Thams-cad 'Yod) なりと説き給ひ、眞諦の力に於ては、滅の故に亦佛性もなく、修するものもなく、修すべきものもない。趣向すべき地も、覺るべき道相もなく、果身も智も

ない。この故に涅槃もない。名と語とに由ての依他起性もない。三界の動と不動もない。本とより存在でなく、無生なり、根もない自性生もない、業も業の異熟もない。この故に輪廻の名もない、究竟義は是の如しと、色より識に至るまで一切法は無諦法である。衆生なくば三世の諸佛云何ぞ生すべき。因なければ果もないからである。これ俗諦 (kun-rdob bden-pa) の力に於ては、輪廻は苦惱より脱し、かくて「一切有」を得ずと説くのである。眞に成就せざるも、亦意義に於て輪廻を脱す一切の能所と因果とは「有」である。かく證得する賢者は識を見ずして智を見る、衆生を見ずして佛を見る、法執を見ずして法性を見るべし、空性を明らかに觀じ、觀じ盡くして誤識の境を見てはならない。智を以て法性を觀じ、觀じ盡くせば法執の有情もない。法身の名を有する法性ありと。是の如き教義は中道解脱派と一致するものと云ふ。

(d) 大手印の教義

大手印 (Mahamudra, Phyag-Rgya chen-po) の意義に就て——字典によれば、手印の差別は無上であり、法と業と誓願とを大手印と云ふ、手 (Phyag) とは空の智であり、印 (Rgya) とは輪廻の法より脱することであり、大 (chen-po) とは、手と印との合一を意味す (Tibetan English D. by Candradas) と。ゼツン、ミラの著「歌頌」の中に「大手印の見城」(Phyag-Rgya Chen-po Ita-bahi Rdson) と名く

ものあつて大手印の意義を説いてゐる。

大手印を領解するところの人の根柢に利鈍の二種類あり。そは氣を身體の中央(動脈)に集注する道を修習するに不適當なる鈍根者は、暫らく到彼岸の宗義の大手印を觀ねばならぬ。又利根に二種あり。宿命又は前生の過去を精はしく究め、動脈の氣を入れて清淨にせねばならぬ。そは第一に心の自體の上に專注する修習に由て、「身體中央(動脈)に氣を住入する三融解法」を修し、自性を明了に領解することが出来る。爰に於て單獨なる補特伽羅の意義を成するであらう。カーベ(Karpe)言く、清淨にせられた我の發見者は單獨なる事を顯示するをうと。その「實階梯」(Rin-Chen Them-Skas)によれば、かの「單獨の我」は積集の我である。原因を清淨にせる我である。心を調伏したる我である、異性の生じたる我であり、最勝にせられたる我であると云ふ。これに就て宗喀巴も我然かなりと言ひて、「氣を身體の中央に住入せしめて清淨にする」ことは、たとひ所緣心を一切に施設すども、「氣を中央に住入せしむ」ことは現示せられうべしと云へり。前生或は過去宿命以後に於ける道を精澄せしめば、一般の道と根と、觀念との増現圓滿等を發展せしむることを要する。かくて、「我」は次第に意義を見出すであらう。カーベ言く、「我」は最初の業を存するから次第に現はるべし。

一般のカーデエバ派によれば、心の根源を斷盡するに、觀法に多くの不同あり。或者は觀念靜慮

の性に於て、自心の内外と、生と住と障礙との何れの場合に於ても成就し考究せらるべく、又云何なることに於ても成就せないことを見るを、心の根源を切斷し心の性を顯現して大手印説の意義を悟り得るであらうと云ふ。

ダクボ、カーヂェバ派より九派を分裂した。

- (1) カルマ、カーヂェバ派 (Karma-bKaḥ-bRgyud-pa)
- (2) バクチュ、カーヂェバ派 (phag-ciru bKaḥ-bRgyud-pa)
- (3) シヤン、ツアルバ派 (Shan Tshal-pa)
- (4) チークンバ派 (hDri-Gñh-pa)
- (5) ルクバ派 (ñBrug-pa-pa)
- (6) タク、ルンバ派 (Stag-Lun-pa)
- (7) バーロムバ派 (ñBah-Rom-pa)
- (8) ヤーザンバ派 (gYah-bZan-pa)
- (9) チョプバ派 (khyo-phu-pa)

(十七) カルマ、カーヂェバ派

カルマ、カーヂェン派はダクボ、ハーゼ (bDag-po Lha-Rje) の弟子デースム、ツェンシ (DusgSum mKhyen-pa, r11og A. D. 生) の又の名ケバ、ウイセ (mKham-pa dBu-sg) からの傳系である。デースム、ツェンシは年十六歳にしてタレボ、チヨク (Tare-po mChog) に従ひ、阿提沙 (Shica) より坦特羅の講義を聴き、十九歳に衛洲^{ツァイ}に來り、拉薩の西北トルン地 (Stod-Tun) のヂャマハバ (Rgya dMar-ha) なる占卜者ツエデ、センダ (chos-kyi Sen-Ge) より彌勒の法々中道義々を學んだ。シャラバ (ga-Ra-ba) よりカーダム派の菩提段道を聞き、翻譯家パーツァー (Pa-Tshah) より中道義を聴き、律師マルバ (Mal-pa) より具足戒を受け、三十三歳のときダクボ、ハーゼに師從して教の奧義に關する疑難を氷解し、シーチェンバよりナロー、マイトリ (Nah-Ro Maitri) の教義を聴き、岩窟に栖みて多年修行し、智識を成就して崇高の徳を積んだ。その後カルマ、ハーテン寺 (Karma Lha-Sten) を拉薩より百里程のツルブ地 (mTsur-Pin) に創立し、カルマ派を稱した。時人彼を呼んで賢劫時代の第六獅子佛の化現者なりと言つた。

デースム、ツェンシは常に黒帽 (Shwa-Nag-po) を被つてゐたから、黒帽持者と呼ばれた。彼の弟子サンゼー、レンツェン (Sais-Rgyas Ras-Chen) あり、又その弟子ボム、チャクバ (Sbom-Brag-pa) あり。蒙古王はボム、チャクバの弟子カルマ、バクシ (karma-pakci) に黒木綿にて帽の縁を製せるものを獻せし因縁に依り、その後分裂したる各派は黒帽を冠するやうになつた。

諸王の贈品中に、黒帽、黄帽の孔雀毛の附着せるものあり。デースム、ツェンバに多くの多枳呢天女は各自の頭髮を以て製せる帽を供へしと傳へらる。その後トクダン、チャクセン (Rtogs-Idan Grags-Stein) より紅帽 (Shwa-dMar-po) を被るの風習起り、この傳系を紅帽派と稱するに至つた。

カルマ、バクシ (Karma-pa-keci) はボム、チャクバの弟子であるが、或は彼はデースム、ツェンバの化身なりとも、或は薩訶羅 (Saraha) の化現なりとも稱せられて、歴史上不明である。但し彼はカルマバ派の第二祖である。バクシ (Pa-keci) とは蒙古語にして教師又は阿闍梨耶 (Sob-dBon) の意である。實の名は「法の無上師」(chos-kyi Bla-ma) の義である。カルマバ派の傳燈者十三世あり、今是を略す。

ダクボ、カーヂェバ派の分派中、カルマ、カーヂェバ派を除いたる餘の八派の概要を叙述すべき筈なれど紙數の制限によりて略することとした。

(十八) シ、ツェバ派の教理

シ、ツェンバ派 (Shi-Byed-pa) の開祖はバダムバ、サンゼー (Pha-Dam-pa Sains-Rgyas) である。彼は南印度ツァーラ、獅子異泉地 (Tsāra-Señ-Gehi Bye-Brag Khron pañi Grin) に生る。彼は七歳のときより聲韻等を學んだと云ふ。彼は印度ビクラマ、シーラ寺の隨布に就て出家しセルリンバ (gSer-

Glin-pa)より觀法を學んだ。

(註) ビクラマ、シーラ寺はグルマ、バラ王が恒河河畔に建立したもので、西紀二二〇三年頃釋迦師利班抵達が同寺を訪問した時分に Bakyar Ghilji の破壊するところとなつた。阿提沙も此寺に多年留錫した。

彼は比摩拉耶山の北東ラプチ峰(Lah-Pyri)に一寺を建て、五度西藏に來れりと云ふ。その重なる弟子はマチク、ラブロン(Ma-gig Lah-Sron)である。

シ、ツェバ派の教理——印度聖者が慈憫によりて人民の生活苦を除滅せしめんとして三度大雨を降らした。その諸降雨を一に集合せる論義海をシ、ツェ(Shi-Byed)と名けて原理の發生を説明す。シ、ツェバ派の教理には、原理發生の根本方法と、坦特羅の四種の斷法を發生する方法との二種あり。「シ、ツェ」とは云何なる意義を有するか。そは妙法が苦惱を「除滅せしむ」(Shi-Byed)といふ法の名を以て稱せるもので、この法に由て前生宿命の業力により今生に於て或は劣身となり、病身となり、貧困となり、非人となる。今これらの不幸なる苦惱を頓に除滅せしむるに瑜伽を縁として忍持するが故に、除滅苦惱の好法と名けらるるといふ。併し今は是の如き見解は取らない。そは般若を領會し、寂靜界に由て一切苦惱を除滅するとの義であつて、此の論義の眞髓もまた般若の領解の確定的智なるが故に、斯く名けられたものと解すべきである。

シ、ツェバ派の三種の坦特羅——此派に初中後の三種坦特羅あり。初の坦特羅は迦濕彌羅國の智

密(Hānagūhya)の同國人オンポ(oh-po)によりて譯出せらる。中の坦特羅はマー地のツェーチ、セラブ(Rma Chos-kyi Ces-Rab)の、ンチエン地のゲンツァン、ソル(So-Chun dGe-h Dun-hBar)の、カム地のイーシ、チャルツァン(Skam Yes-Ces Rgyal-mTshan)の三人が以前の教理を増補したものであると云ふ。後の坦特羅は開祖バダムバ、サンゼーが西藏とネパール國との國境の東南に位するDin-Ri-Glan 地を巡錫せる際、上足弟子ダムバ、ハルツェン(Dam-pa Phar-Chen)の、チャル、チエン(Phyar-Cun)の、ブツェラ、クロド(Vajra Krodha)の、クンカーバ(kun-dkah-Ba)の四人が五ヶ年間師従してゐた、そのとき師は此後の坦特羅を譯出したのである。

初の坦特羅は、除滅燈三類(Shi-Byed Sgron-Ma Skor-gSum)の、夜魔帝(gCin-Rje gCed)等の諸法を成就する方法である。中の坦特羅は語の坦特羅と義の坦特羅との二種あり、義の坦特羅には十六支の教訓あり。マ地のツエチ、セラブの法類によれば、語の坦特羅には觀念の心生と、空相應(Ston-Thun)と、口中より吹散すること、口中に入ること、鼻中に入ること、廣大無邊等の方法を説く。ソ、チュン地のゲンドゥンバルと、カム地のイーシ、チャル、ツァンとの法類に就ての教義はそれれ多少の相違あるも、今は之を略す。

(十九) 薩迦派の傳系と教義

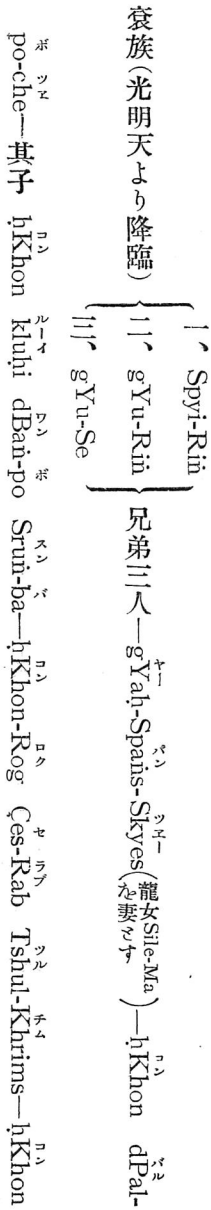
薩迦派の開祖はコン族(hKhon)のコンチヨク、チャルボ(dKon-mChog Rgyal-po)である(元史釋老篇)の足克表氏、又は昆貢^{hanna}チャルボ)。コン族の血統は光明天(Hod-gSal lha)より降臨し、チリン(Spyi-Rin)の、ユリン(gYu-rin)の兄弟三人にして、是等の天人よりヤーバンツ^hー(gYah-Spans-Skyes 斷慄生)に至るまでを神代系と稱す。ヤーバンツ^hェーは羅刹のチャレン、チャクメ(Skyra-Reus Kkrag-Med)を調伏し、戰慄すべき龍女シレーマ(Sile-ma)を室に迎えて一兒を擧げた。漸次血統を傳へてコ族と名けて有名である。

コン族のバルボ、ツェ(hKkhod dPal-po-Che)の代に至り、風俗好良、大勢力ある幸福のバルバ(Phal-pa)より特に優秀なるもの出た。バルボ、ツェの子コン、ルーイ、ワンボ、スンバ(hKkhon Klulhi dBan-po Sruis-Ba)は大隨布寂護(Cantarakṣita, Shi-da-hTsho)に就て、七人の試験生として出家したもの一人であつて、セラブ、ツェーシ^h(ges-Rab che-cos)を命名せられた。次でコンロクセラブ、ツチム(hKkhon-Rog ges-Rab Tshul-Khrims)に至るまでの血統者は、舊秘密曼特羅を理解するもの出た。

次でコン、コンチヨク、チャルボ(hKhon dKhon-mChog Rgyal-po)なるもの出て曼特羅と一切性相學に通じた。彼は市場の中央街頭に於て多數の修驗者が二千八名の婦人と共に假面舞踏せるを目標し、ツェン(gCen)喇嘛にその事情を訊ねしに、彼の喇嘛言く、予は秘密曼特羅の錯亂した時代に

出世したもので、今後西藏は舊曼特羅に依て成道するものは出でないであらう、従つて各自に持する曼特羅を巖窟内に隠匿するであらう、予は今や老ひた、汝はムクルン地(Mu-Gu-Lun)の博學なる翻譯家釋迦伊士(Cakya Ye-ges)を訪ね、彼に就て祕密呪を學ぶべしと。彼は釋迦伊士に師從し、新譯の祕密曼特羅を實修した。又西藏グー族(hGos)のものにして洞窟の隱者ハーツヘー(Lhas-bTsas)と、迦濕彌國の班抵達ハンドゥ、カルボ(Han-du dkar-po)と、マ地の譯家リンツェン、チョク(Rma Rin-Chen-in-Chog)とチンギン、ロシマツ(hDsin-Ba Jo-Tsiba)との諸大徳に依て導かれた。かくて後ち彼はサカル、ウイ地(Sa-dkar dBus)に一寺を建立した。是れより後ち薩迦派(Sa-Skyapa)と稱するに至つた。(Sa-Skya とは地名にして、灰色の土地の義である。藏洲の西方百餘里程にあり)

(a) 薩迦派の衰族の血脉相傳



dKon-mChog Rgyal-po (薩迦派の開祖) — 其子 Sa-Chen Kun-dGah Sñin-po (第二世 (1150 A. D. 生))

其子

- 長男 Kun-dGah iBar (印度に死)
- 次男 bSod-lNams Rtse-mo
- 三男 Grog-spa Rgyal-mTshan
- 四男 dPal-Chen Hod-po

其子

- 長男 Sa-Skya Pan-Chen Kun-dGah Rgyal-mTshan
- 次男 Zans-Tshah bSod-lNams Rgyal-mTshan

其子

- 長男 hGro-mGon Chas-Rgyal hPhags-pa (帕克巴)
- 次男 hGro-Gon Chos-Phyog-Na

(b) クンガー、ヂャル、ツアンの略傳

薩迦派のクンガー、ニンポは大元成吉思汗より、西藏全土の統活權を委せられ、蒙古開教を命ぜられた。薩迦班禪クンガー、ヂャルツァン(Sa-Skya pan-Chen Kun-dKaḥ Rgyal-mTshan)は叔父デ

ヤクバ、ヂャルツァンに従ひ、薩迦派の開祖コンチョク、ヂャルボの講説せる經と曼特羅との奥義を漏れなく聽いた。新世親 (dByig-gNen) より俱舍論を、迦濕彌羅班禪より金剛曲 (Rdo-Rje Gtu) を、Shu-Ston Rdo-Rje-Skyabs より彌勒法の勸令を、Rma-Bya Byai-bKtson y Tshur-Ston gShon Sen とより唯識を、Rtsogs-pa dBai-Phyug Sen-Ge より教理を、Spyi-Bo lhas-pa Byai-Chub-Hod 種の論義を聽いた。二十三歳のとき迦濕彌羅班禪に會晤し、班禪及其弟子 Sanghacri y Sugatacri y, Danacri とより五明學と韻音修辭學等を學んだ。二十七歳のとき迦濕彌羅班禪より具足戒を授かつた。彼は五明藏と三誓を細別し、惡見を辯駁した。彼はネパール國に近き Skyid-Gron の都邑に於て、南印度の外道 hPhrog-Byed gTshos-pa と法戰して、その邪見を絶滅せしによりて彼の名聲は揚がつた。後ち彼は蒙古王 Go-Dan に請聘せられ、かの地に巡化し教法を宣布した。このときクンガーヂャルツァンは六十六年の老軀を提して元朝に來り (1245 A. D.) 甘肅省涼州に於て Go-Dan (元史の庫騰汗) に謁し、當時蒙古に固有文字は未だなかつたが爲めに、彼は蒙古人間に流用されてゐた畏兀兒文字 (Uigur) を改刪整訂し、是にラントツア梵字體の文字を應用して始めて完全なる蒙古文字を創定した。かの帝師は成吉斯汗の第三子窩濶臺の次子庫騰汗が建立したる萬里長城の支城、「居庸關」(現今昌平州漢の上谷郡) の慶讚式を修した。其後泰定三年五月に修繕し、更に十九年即ち (1248 A. D.) 元の至正五年己酉九月に西蜀成都の法積寺の僧徳成なるものは、欽命を奉して修理し、此の「居庸

關」上の法塔の由來を關の内壁に鑄入し、畏兀兒文字の尊勝陀羅尼は此時に刻せられたものである。支那山東省の濟南城より少しく南方に當りて長清縣あり、そこに靈巖寺あり、唐代の製作に係る千佛體あり、能く世人に知らる。境内に碑文あり、大元帝師コンチヨクヂヤルツァン管着兒威藏(dKkon-mChog Rgyal-mTshan)の法旨を鑄せるもので、蛇兒年三月二十三日に建てたものである。この碑文の「管着兒威藏」とは碑銘の西藏原文には *dKkon-mChog Rgyal-mTshan* と記してあるが故に、この原文の帝師の名は西藏史(前記)に言へる薩迦派の開祖 *kKkhon dKkon-mChog Rgyal po* と類似の名であるから、二者は同人異稱の如くに、見られるけれども、コン、コンチヨク、ヂヤルポが元帝に招聘されて帝師となつたといふ史實は元史に見えないから、碑銘のコンチヨク、ヂヤルツァンは薩迦派開祖のコン、コンチヨク、ヂヤルポを指示するものではなくして、是れは薩迦班禪サチヤパンツェンクンガー、ヂアルツァンの異稱であつて、コンチヨク、ヂアルツァンは即ちクンガー、ヂヤルツァンと異名同人であると考へらる。(エドワール、シャヴンスは碑銘の漢文を佛譯してゐるが、誤譯あり。Young, Pao. Edward Chavannes. P. 419—421, 1908)

(c) 怕克巴の略傳

ロゴン、ツェーヂヤル、バクバ(iGro-Gron Chos-Rgyal iPhags-pa)は「元史」の大元帝師怕克巴喇嘛

である。彼生るゝ^ハ (1233 A. D. by Waddell's Lamaism) は伯父薩迦班禪クンガー、チャルツァン言へり、兒は他のものよりも秀勝なるであらうと、末歳に生れしに因みて hPhags Lung-Skyes (末歳に生れたる優勝なる者の意) と名命せられた。三歳のとき、悉地は心中に湧出で、人を驚かしたから、これ實に勝れたるもの(聖道)なりと言はれ、その事世間に傳播して怕克巴(hPhags-pa, 聖者)と稱せられた。八歳のとき本生譯を、九歳のとき觀察を話したと云はる。十歳のとき拉薩の法輪殿にて薩迦班禪に従つて出家し、セルセン(Gel-Sen)に従ひて修養法を聽き、十七歳のとき薩迦班禪に伴はれ蒙古に巡錫した。薩迦汎禪示寂して大元^セ Se-chen 汗(忽必烈汗 Hulilai Tshu-Chen-Ham ?)に金の剛の灌頂を授け、帝師の尊號を授けられ、西藏十三州統一を委ねられた。

彼は二十一歳のとき蒙古に巡化し、支那と蒙古との國境に於て長老チャクバ、セング(Grag-s-pa Sen-Ge)を、教師ソドナム、チャルツァン(bSod-Nams Rgyal-mTshan)を、祕密尋問者チャンチュブ、チャルツァン (Byan-Chub Rgyal-mTshan) をの三比丘より具足戒を授かり、薩迦地に還り法財を以て全藏民を潤した。

後ち再び大元帝より招聘せられ、蒙古に化錫し、大元帝に灌頂を授け、多大の優遇を蒙り、還藏し薩迦地に歸り、藏州のチュミク、リンモ寺(Chu-Mig Rin-Mo)に於て七萬人の僧伽に大布施を修し盛に法輪を轉じ四十六歳にて示寂した。

薩迦派の經と曼特羅との法門は無量である。特に祕密呪文の四部の坦特羅の灌頂と、坦特羅の釋と、論義の行業集等あり。例せば定行三部、大紅三類、小紅三類、無生金剛天母、妙吉祥黒の十三類あり。

(二十) 新教宗喀巴の改革

宗喀巴(Tson-Kha-pa)は明永樂十五年(西) (1417 A. D.)に今の支那甘肅省西甯府の西南六十清里の安土地アムドのクンブン寺(Sku-h-Bum; 俗稱「塔爾寺」タル)の廟地に生る。父をカツェ、ルーブンゲ(Kha-che Kin-h-Bum-Ge)と云ひ、母をシンモ、アツハ(Cin-mo A-chos)と云ふ。六子の兄弟中彼は第四子である。父母はマル族(Mal)の血統にして七代續き、同族約千人あつたと云ふ。羊牧者としての父母の天幕生活中より呱呱の聲を揚げ、容貌偉偉、頭大額廣、眉濃、鼻隆、耳齒、吉祥の相を具し性頗る潤達であつた。彼は七歳にしてツェゼー、ドンチュブ、リンツェン喇嘛に従ひ出家し、沙門となり、後に彼は十六歳のとき西藏拉薩府に來り(1432 A. D.)諸處靈廟に學者を訪ひて研鑽した。彼が名聲全藏に振ふた頃、故郷安土地の母親より一度歸省すべきを要望せられしも、當時西藏佛教の腐敗を改革するは自己の天職なりと自覺によつて、遂に故郷には歸らなかつた。然るに彼の故郷安土地の彼の生地アムドの屋敷の後方に栴檀の香木は自然に生じ、その樹葉毎に文字或は佛像等の奇瑞を生じたり

と奇蹟を傳へるに至つたのである。後ち明帝はその奇木を中心に塔を建て、塔を本尊として伽藍を立て、今日に及んでゐる。クンブン寺即ち十萬體寺と云ふ。これ葉毎に名字等の奇蹟の表はるゝこと無數であるとの意より名けて十萬體寺と稱せられてゐる。(明末時代に佛國の宣教師 H. 氏は當時未だ立塔に奇蹟の現はれてゐたことを記してゐる。予は往年彼地に留學の節、親しく實現せしに、今は塔内の奇木は見るを得ず、奇木の根が廟前の庭上に伸び出で、老株となり枝葉を繁茂してゐ、試みにその數葉を記念品に持歸りて檢するも何等の奇蹟の表徴はない)

宗喀巴は阿提沙の半改革の遺業を繼續し、阿提沙の「菩提道燈論」に依りて腐敗せる西藏佛教を完全に改革し、經と曼特羅との合一を經とし、戒律を緯とする清涼道風の新宗教ゲルクバ派 (Gelugs-pa) を樹立し、西藏拉薩の東南一日里程の地、喜水河を南に渡つた山間にガルダン寺を建て特律堅固の法幢を宣揚した。

この時、支那大明帝は篤く宗喀巴を信じ、勅を下だし、支那に來錫せんことを使節を派して懇請したるも、彼はゴンチェンバ (mNon-Chun-ba) の洞窟に住し、國使との會見を許さなかつた。西藏チャクバ、ヂャル、ツァン (Grags-pa Rgyal-mThsan) は大臣ナムカー、ザンボ (Nams-mKhah bZan-po) と俱に國使を介して彼に會見せしめた。然かし彼は國使の意を否み、支那飛錫を拒絶した。

宗喀巴は出家沙門の行法儀式を規定して言く、何人も諷誦に従つて頌句を誦し、阿闍梨より訓誡を受け、心に意義を思惟し、尋問唱提に依つて解説諍議を開始せよ、而して云何なる沙門も飲酒、

非時齋、放逸なる遊戯等を一般民庶に促して犯してはならない。當時の沙門は此の忌むべき諍論、鬭爭、非法を犯して恬として顧みるものなく、沙門は清規に悖れる黄色袈裟を着用し、傲慢に流るも誰も之を咎めないばかりでなく、散亂放逸にして金剛乘の定中發現成就法、曼陀羅儀軌を學修するものなく、淫りに村落都邑の寺院人家を巡りて供物を強求し、死者加持等を行つて食物を要求し、敢て淨罪會に集りて心を正すものないやうになつた。或は秘密眞言を修すと公言しながら飲酒、非時齋、遊戯に耽り、慾淫を増長して清規を逸し、或は秘密眞言法に入つた後は、敢て沙門出家の戒法を遵守するを要せずとて、制戒を放擲し、一般男女の群に混じて毫も改悔の色を表はさず、具足戒の希望者もなく、釋教の癡類は吾等秘密修行者の罪にあらずと辯護し、世間を損害した。彼等は内心の定智を觀するが如きは、却つて動搖の原因を招くに過ぎないとして貶し只優婆提舍に依りてのみ空智は得らるべしと思ひ曼荼羅の冥想、眞言呪文の唸誦、禮拜供養を廢し、是等の儀式を廢するも一般空智は得らるべしとて毫も之を修するものはなかつた。

佛陀は戒律を沙門の清規の根本とし、自性空觀を獲得するは聞思を修して成就せらるべきを教へ給ふた。然るに彼等は眞言、般若、聞思等を疑惑反駁し、正法戒律を阻礙し、靈山國中に佛像を多く奉安する信者の減退するに至つた。此時に宗喀巴出て正法護持の誓願を起し、一切弊害を改革し沙門の威風を直し、飲酒等を廢し、教理奧義の研究を行ふものなかつた。彼等は秘密眞言の金剛乘

に入らず、古き真言の担特羅を見聞せり、只喇嘛の論義を聞くのみを以て足れりとしたのである。しかし優婆提舍の深義を思惟せんには、只担特羅を外にして他に良法はない。げに甘露味により各自に戒律を持し、沈思精勵して疑なく決定せば、自から執金剛の最高智を得るに至り、論義の奥義を誤りなく了解し、修習中の増長觀成就の法を修し、終極に達するであらう。

或は誓願と戒律とを精進し、瑜伽に入り、坦特羅の意義に無畏を得て幸福を隨持する金剛大闍梨の最高智を得て、定中増長觀を實修するに由る坦特羅と同一の歡喜を生ずるであらう。

宗喀色の臨終の際、金剛の結跏趺座し、二手契手し一心に入定觀念せしに、恰も日出で、三界を照らし、光明赫灼として一切空なるが如く、絶對定即眞諦を顯現し、鼻喉の荒き呼吸を内部に收め口輪少しく上り、顔色輝々として耀いた。かくて安らかに生命を脱したりと。かくて宗喀巴は兜率天に往生して文殊心菩薩たらんと豫言した。そは龍樹は初歡喜地を證して極樂に往生せし如く、宗喀巴自からも執金剛の命智の位を明かに證せるは、二者は何れも同一化身を現はする能力を示せりと傳へらる。

宗喀巴入寂後、その第一弟子ダルマ、リンツェンバ。又の名チャ、ツアブゼ (Darma-Rin-chen, Rgyal-Thsab-Rje) は師の後を繼ぎて傳燈した。次でチャクバ、チャルツァン (Grag-s-pa Rgyal-mThsan)

は諸大徳の懇請に應じて大法王國の主となり宗喀巴の宗風を繼承し宣揚した。

以上喇嘛教々理概説は西曆一八〇一年にローザン、ツェヂ、ニヤ(Blo-bZan Chos-kyi Ni-Ma)の著はせる「一切教理の奥義と願望方法を説明する善釋明鏡書(Grub-mThap Thams-cad-kyi Khuns Dan hDud-Tshul-l'a Ston-pa Legs-hCad Cel-gyi Me-Lon)に據りて大要を記し、その他の諸書によりて多少の解釋を述べたのである。そして最後「二十(新教宗喀巴の改革)の項は、宗喀巴の二大弟子の隨一なるチーチュブ、ゼ又は名ゲレク、バルザンボ(mKhas-Grub-Rje, dGe-Legs dPal-bZan-po)の著書にして、宗喀巴全集中に編入せる「宗喀巴傳」(Tshon-Kha-pahi Rnam-Thar)に據つたものである。原名は「妙尊大喇嘛宗喀巴驚嘆殊勝傳入信必要書」と稱す。

西藏喇嘛教に理史を書くに就ては、西藏史と交渉的に西藏佛教史を諸種の原典資料に基づき支那賦上に殘さるゝ政治的關係、さては印度佛教史、ネパール佛教史、中央亞細亞文化史料を參照して年代的に教理史的に叙述するの必要と、その用意とを有してゐれど、今は「大谷學報」の編輯員より史せられたる課題の範圍に於て單に「喇嘛教々理概説」を草綴したに過ぎない。何れ他日時機を得て「西藏佛教史」を公表したい念願である。(昭和五、七、六)